毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊 定價金五錢



明治二十九年四月二十五日發兌

第七拾六號

四月二十四日賣發

英國　ギッビンス著
日本　水上梅彦譯

英國產業史

鮮明なる挿圖四葉入
上卷定價二十五錢
郵稅四錢
○下卷近刊

現世界は富の競爭塲也貧國は亡び富邦は興る貧富は强弱なればなり苟も國を寰宇に建つる者、苟も祖國の强大と民運の千萬載ならんとを希はゞ富國の機關を伸長せざるべからず產業即ち農商工業を革命するは日本帝國膨脹の基礎也如何にして帝國產業を革命すべき乎銘記せよ日本帝國は產業に於て**創立の時代**なるとを、**幼稚**なるとを、**後輩**なるとを。英國は產業上我國の先蹤とし師表とするに足るもの也英國產業史は**我國の指南車**とすべきもの也ギッビンス氏の『英國產業史』(再版)は該國產業經濟史の本流を最も明快に最も正確に指摘せる乎は業に已に歐米間に於て定論ある處、吾人の呶々を要せざる也

全國尋常中學、師範學校殊に商、工學校教科書として至適至廉の譯書也

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

新刊發賣

社會叢書 第五卷

資本の活用

定價金十錢 郵稅二錢

茲に十圓の資本を有するものあり、百圓、千圓、萬圓の資本を有するものあり、如何にして此資本を活用すべきか、資本は到底死物なり、人の力によりて始めて動かされ且つ活かさるゝものならずや本書は理論と實際とによりて如何にせば資本を運用活動すべきかを說明して事業家の一粲に供し且つ其實行を促す即ち章を分ちて四となし、(一)『資本の活用』に於て資本の活用を概論し(二)『一個人の投資』に於て詳細に其活用方法の道を講し(三)『共同の投資』に於て數人共同の資本を以て事業の計畫及其得失を論し(四)『資本活用家』に於て最も手近き資本活用家の實例を示せり

社會叢書 第六卷

學問の應用

近刊

第二

一語千金

定價五錢 郵稅二錢

歐米名家が、片言隻語宇宙の眞理を說明し、造化の秘奥を闡明し、以て誦すべく、以て歌ふべく、咀嚼愈〻精なれば興味愈〻深し、所謂る一語千金なるもの、此書が如何に有益にして、江湖諸君の愛好に投じたるかは、第壹一語千金が既に八版を重ねたるを以て今更ら呶々を要せず、今や部門、躰裁總て同一なる、第貳一語千金を發刊す乞ふ愛好の諸君一本を坐右に供せよ

新刊 第七

國民小說

定價十五錢 郵稅四錢

最も江湖に歡迎せらるゝ國民小說の第七は◎寛政中の世界環航者◎うらおもて◎薊のなかめ◎恐ろしき一夜◎嫁形氣◎初戀の記◎訪はぬ墓◎この馬鹿◎脫營兵◎靴師◎自然兒◎支那問罪義經仁義主汗の十一篇を編纂し、流暢、沈痛、快絕、悲絕の名作交錯綜出せり。末篇義經仁義主汗は「北征雄略」として出版の豫告せしもの。今回此集に加ふることゝせり。

第八國民小說篇を追ふて來月に出版すべく。第一より第六まで目下何れも成版せり。

發行所 東京市京橋區日吉町 民友社

明治廿九年四月廿五日發行
家庭雜誌第七拾六號

目録



家庭雜誌第七拾六號

(明治廿九年四月廿五日發兌)

社說

家庭と醫師

醫師は家庭に病人なき限りは入來の必要なし、醫師の入り來る家庭は不健全なり、家庭に誰か病人あるが爲なり、吾人は家庭に病人なく、醫師の入來なきを禱るものなり。

併しながら家庭に病人あらんか、又は急變あらんか、是非とも醫師を迎え其診察を乞はざるべからず、而して病人の速癒全癒を計らざるべからず。

家に病人ある時は、其家庭は何となく陰欝にして面白きものにあらず、一言せば不健全なり、家に一人の病人あらんか、家庭の總ての人は此病人の看病に打かゝらねばならぬゆゑ、家政の上に頗る面倒を重ぬるものなり。

病氣の起る種々なる原因あらんが、詰る所は不衞生にあるなり、不衞生より病氣を起し、發熱苦痛を感ずるに至り、周章して醫師を迎ふ、これ家庭と醫師との關係なり。

吾人は急變の場合に醫師を迎ふるのみに限らず、無事安全の時に於ても醫師の來らんことを望む、これ何の爲なるか、第一は家に病人起るを未然に防ぐこと第二は衞生的の知識を得ることなり。

夫れ精神の健全なるを欲するには、牧師の來るを待ちて其說教を聽聞するにあらずや、肉體の健全を欲するには醫師の力を假らざるべからず、醫師の力を假りて以て病患を未萠に防がざるべからず。

さて斯かる理想を實行するには、吾人聊か方法を有す。

たとへば朋友の家庭五十軒乃至百軒合同して衛生俱樂部の如きものを設立し、一家につき每月五十錢か一圓の金を出し、一人の醫師を聘し、每週一回づゝ家內中老人より小兒下婢に至るまで總ての人其診察を受くべし、此事たる身體無事の日は必要なきが如しと雖も、病患の發するや、素人の知らざる微細の點にあり、本人や其他家人の知らぬ間に病患は次第に增長するものなれば、其の大事に至らぬ間に醫師の診察を受くれば、手輕く治療せらるゝなり、診察を受けて病患あれば其醫の方箋によりて藥劑家より藥餌を求め、病患なければ何よりの幸福にして、醫師より其時々の衛生談、たとへば飲食物の注意或は衣物の注意、或は傳染病の豫防法との指圖を受くるやうにすべし、これ病患を豫防すると同時に衛生的知識を得るの道なり。

一軒の家庭にて一個月五十錢宛出金すれば百軒にて一個月五十圓、一圓宛なれば五十軒にて五十圓なり、五十圓なれば大學卒業の醫師は雇ひ得らるべし、それより少額にても開業醫の傍職に委賴しても宜かるべし、吾人が此論を草する所以は、各家の人をして病患を未萠に防ぎ併せて衛生的知識を有せしめんがためなり。

愛敬の本

親しき人を愛し貴き人をうやまうはいふに及ばす、疎き路人に對し、賤しき乞丐に對すとも、みなこれ天地のうめる人なれば、其の分に隨ひて愛敬すべし、惡み侮るべからす、疎き親しきにより、貴き賤しきに隨ひて、愛敬する厚薄は有るべけれど、愛敬せざることなかるべし、凡そ愛敬を行ふには信を本とすべし、信とは愛敬を行ふに其の心眞實にして僞りなきなり、信なければ實の愛敬にあらす、信は人に交はる道なり、信なくは人と我との心感通せす、いかに言と貌とに愛敬をあらはすとも、信なければ、人まことゝせすして愛敬の道行れす

(貝原益軒)

科學

瓶壜の抱栓

市村塘

世の細君たる人よ、諸君のうちには必ずや客人の爲めに、屢々ビール瓶、或は葡萄酒壜の抱栓を抜かせらるるとあらん、そも其抱栓といふのは何であるか、尤も是は一種の植物木皮より攅採したるものに外ならざるは、とくと御承知のことなるべきも、是果して如何なる樹木の皮部なるか、又何が故に抱栓に適當するやに到つては聊か述べ置く必要あるべしと思ふなり。



さて、其原植物といふべきものは槲の一種にて、其の學名を抱槲 Quercussuber, L と謂ひ、殻斗科Cupuliferae に屬する四季常綠樹の一なり、高さ四丈六尺幹莖四尺内外に達する喬木にして、雌雄異花なれども通常同株にあり、圖の上部に位するものは雌花簇、下部にあるは雄花軸を示す、雄軸の各花は八裂の花蓋と上に同數の雄蕋を具ふ、熟後花粉を放散しこれが雌花—壜狀の子房と三箇の柱頭に達すれば、受胎して後所謂果盃を付けたる殼を結ぶものとす。





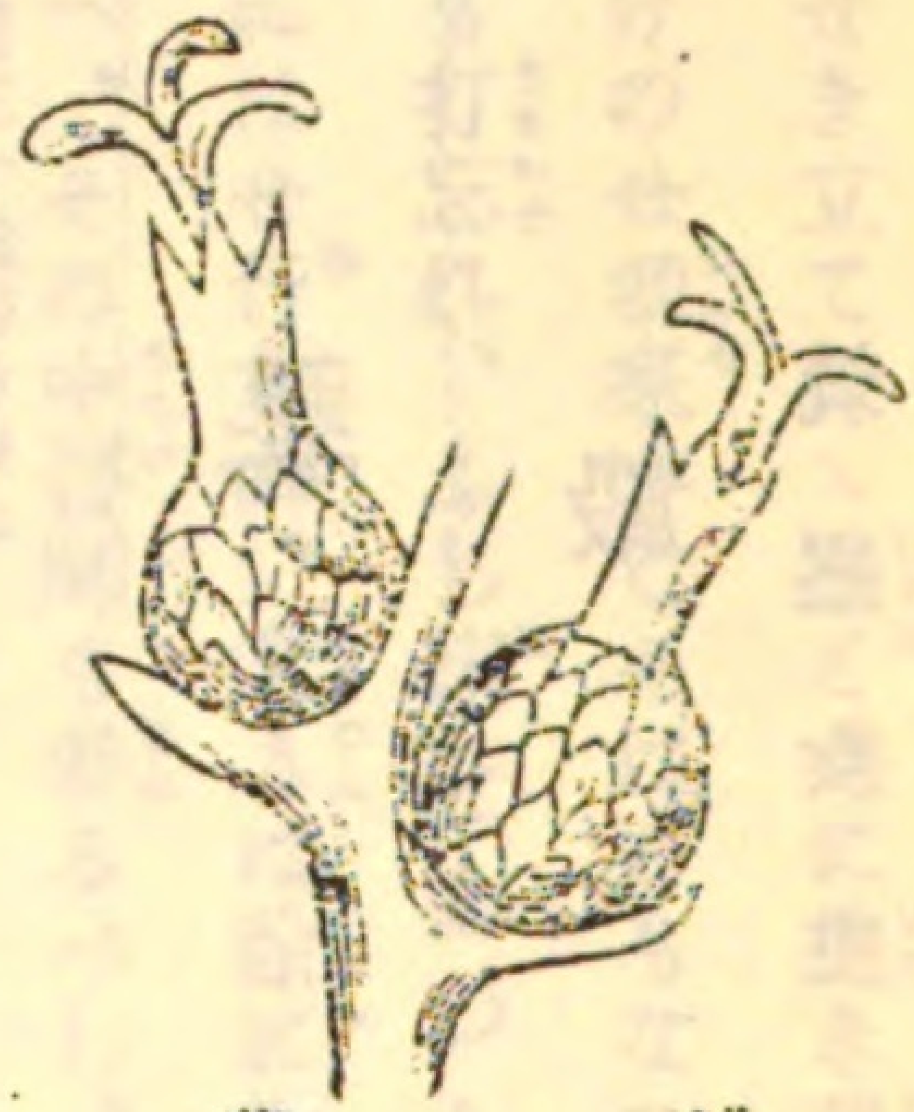
雌花

而して、抱栓に供する部分は該樹の皮部なる抱層に係る如何なる高等植物にも抱層を缺くものなしと雖も、抱槲に限り殊に能く發達するのみ、衛矛の如きは多少發達する方なるも、其厚さ六寸に及ぶなどは槲樹のパテンーと云ふて可なり。



抱櫚枝梢(雌雄器併有の圖)

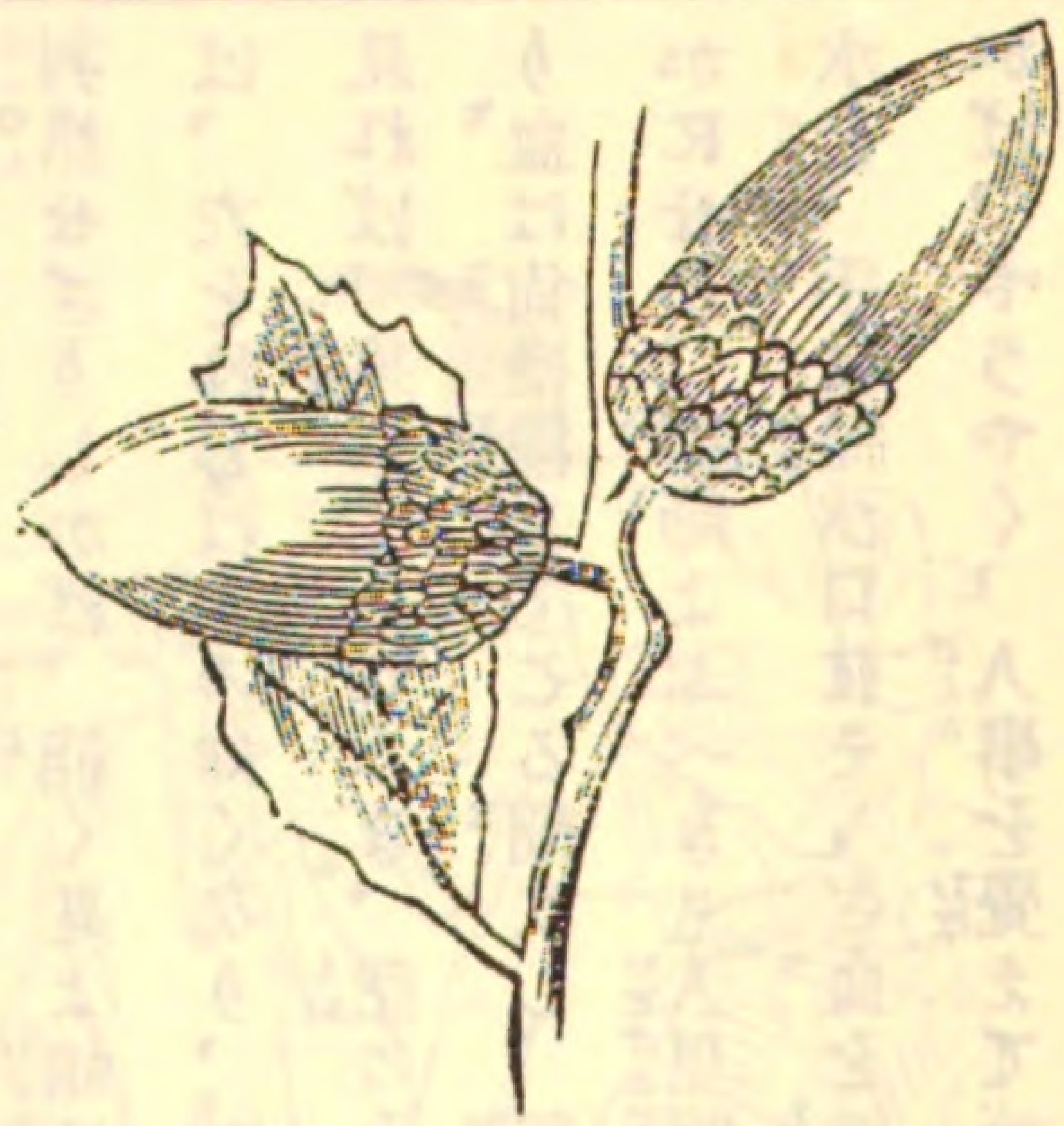
抱瘤とても、決して一二年間は最外皮は抱層にあらず、別に表皮なるものありて存し、木幹を被包せり、三年目より漸く其下部に抱層を増厚し始むるを以て、外皮自ら縦裂剝落し、終に抱層を露出するに至る、是を雄抱と稱し亞非利加アルゼリア邊にありては、採て薪材或は覆屋用となす位が關の山なり、次に生ずるは母抱にして其剝離後、始めて抱栓用に適する雌抱を發育す、雌抱は十年間位は大丈夫適宜の厚さの抱板を收穫し得るといふ。



雌花

ケーレル氏は該樹を以て南北四十五度の間に繁殖し得るものとなせども、我邦のQuercusoccidentalis はとても採抱に適せず、目下主としてジブラルタル、北亞非利加、佛蘭西、以多利地方より諸邦に輸出せり。

一躰抱栓の用たる、水分を吸收せずして却て板撥するにあり、其理は一種の脂肪質スベリン(Suberin)7%を含有するに歸すべきものなり、此物質は硝酸に合へば抱酸($C_8H_{14}O_4$)を拆出す、其他勿論少許の鞣素、芳香油、チエリン蠟、樹脂、黄色素を存在せり、抱栓の細胞は已に死し遺骸は一様に直方形を呈し、其皮膜に是等の成分抹着す、



果實

因て瓶壜を洗ふ時などに見る如く抱栓は通常水面上に浮游するものなれども、加里にし煮沸せば次第に液中に沈沒すべし、あなた方は先づ是丈の話を記臆せらるれば小供に對しても恥をかくとなかるべし。

端午の節句

端午の節句の幟人形類は本年は諸物價高直の折柄なれば昨年に比し概して三割方も高直なるが十軒店等の各店の賣行きは頗るよく殊に地方よりの注文も多く中々の上景氣なり枠の相場は幟屏風形二尺五寸もの三圓七八十錢、上物桑の類十二三圓、幟上物五尺十一二圓、幟三本柱六尺上物十三圓七八十錢、同中物九圓八九十錢、下物七圓五六十錢、四尺五寸より五尺まで八圓二三十錢より以下六圓七八十錢まで、鯉は紙製九尺もの三十錢、三間半物一圓五十錢、布製製九尺物一圓三間半、三圓五十錢、五間物にては紙上物四圓、布製上物六圓八十錢、又吹流し座敷小物七十五錢、二ツ車一圓五十錢、外出しメリンス三ツ裂二間物矢車つき六圓より九圓まで、幟は何時も同じ高砂神后皇后などなるが本年は陸海軍の將校の圖もあり並物二圓八十錢位、鎗二間以上二圓五十錢是は中白鳥毛にて人形は尺立二圓以上六圓まで、八寸一圓八十錢、五寸一圓三十錢等なりと

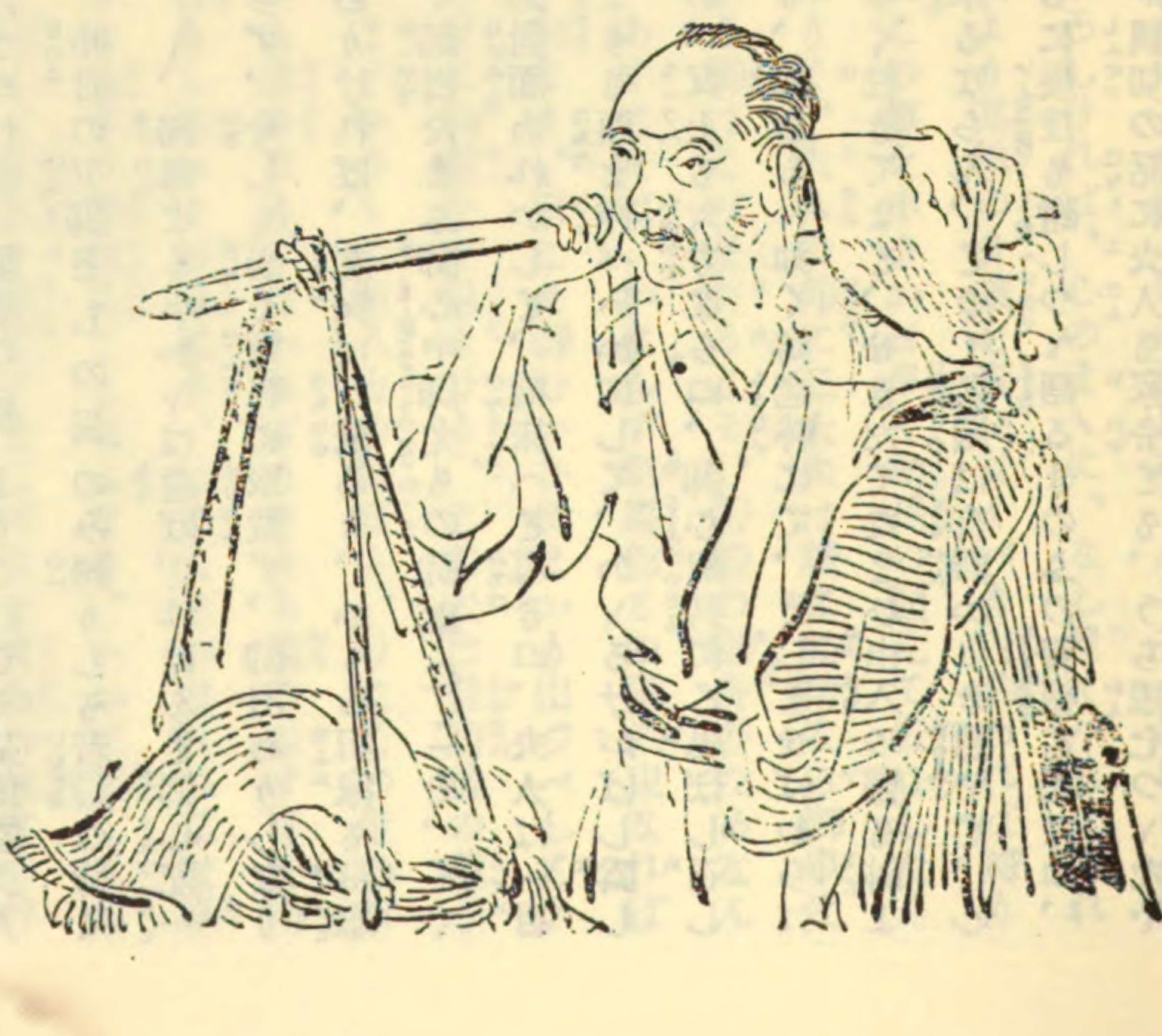
文藝

若殿

筑峯女史

日も早や西に傾きぬ、けふも朝より市に出でひさぐ野菜も賣りはたし歸路いそぐ二人づれ、なぐさめられつ、慰めつ、たがひに勵ます親と、子がいとむつましく、諸共に早く歸りて買ひ得たる肉を夕餉の料とせん、ただそれのみを樂しみに家路をこそはいそぐなる、行手の森をはなれ、村鳥の、さもかなしげに、鳴き渡るこそいと悲しけれ、行手に何か横はりぬ、老人の眼に判然せざりしかば、能く見よ娘と父の命、眸をこらせば、たをれしは人の如くなり、おづ〳〵差し寄りよく見れば、果して人なりき、然のみか早事切れて頭部より血は倘ほ湧きてこる間なし、親子は心まどひつゝいかにせん、醫師よぶべきも人里離れし田甫中、流れの水を、手に結び口にそゝぎ血を洗ひ、耳元近く呼びしかば、やうやく、人事を覺えてか、いぶかしげにあたりをば、見まわしぬ、親子は喜び樣子を倘ほよく見れば、若紳士の馬乘衣身に着けていと氣高き人柄なり老人やがて、何はともあれ、ちかき草が宿まで御伴し

て、やぶ醫にても詮方なし、急ぎ手術を、まひらせん、はや〳〵御供仕らんと、せき立てつゝ娘と共に抱き起し、ありあふ荷車にたすけのせ我家へこそはともなひぬ、二人の者は夕げの事も打忘れ、ふし床をまつらひ、娘は直ぐに醫師がりにはせ行きぬ、老人は徐に進みより心丈夫に待ち給へ、その中醫師も參るべし、と慰め、いたはる程もなく、娘は醫師を伴ひ入り來りければ、見るより老父は、いそぎ、むかひまづ診察をと急げば、醫師は不審の顏色、見しともなき紳士の容躰伺ひて、きづは幸ひ淺けれど、場所いとあしければ時節柄よほど、用心なさゞれば全癒いたく手間取るゆゑ注意專一なるぞかし、殊に少しにても身躰を動かすは甚だよろしからざれば、しばらく其のまゝに打臥して氷嚢絶えずあてらるゝこそ緊要ならめと、云ひのこしあすを約してぞ歸りける、親子は夜の目も合せず大切に看護をなして何事も云ひ出さずして病人の心の休めをつとめける、一夜明くれば病人も餘ほど心地よく

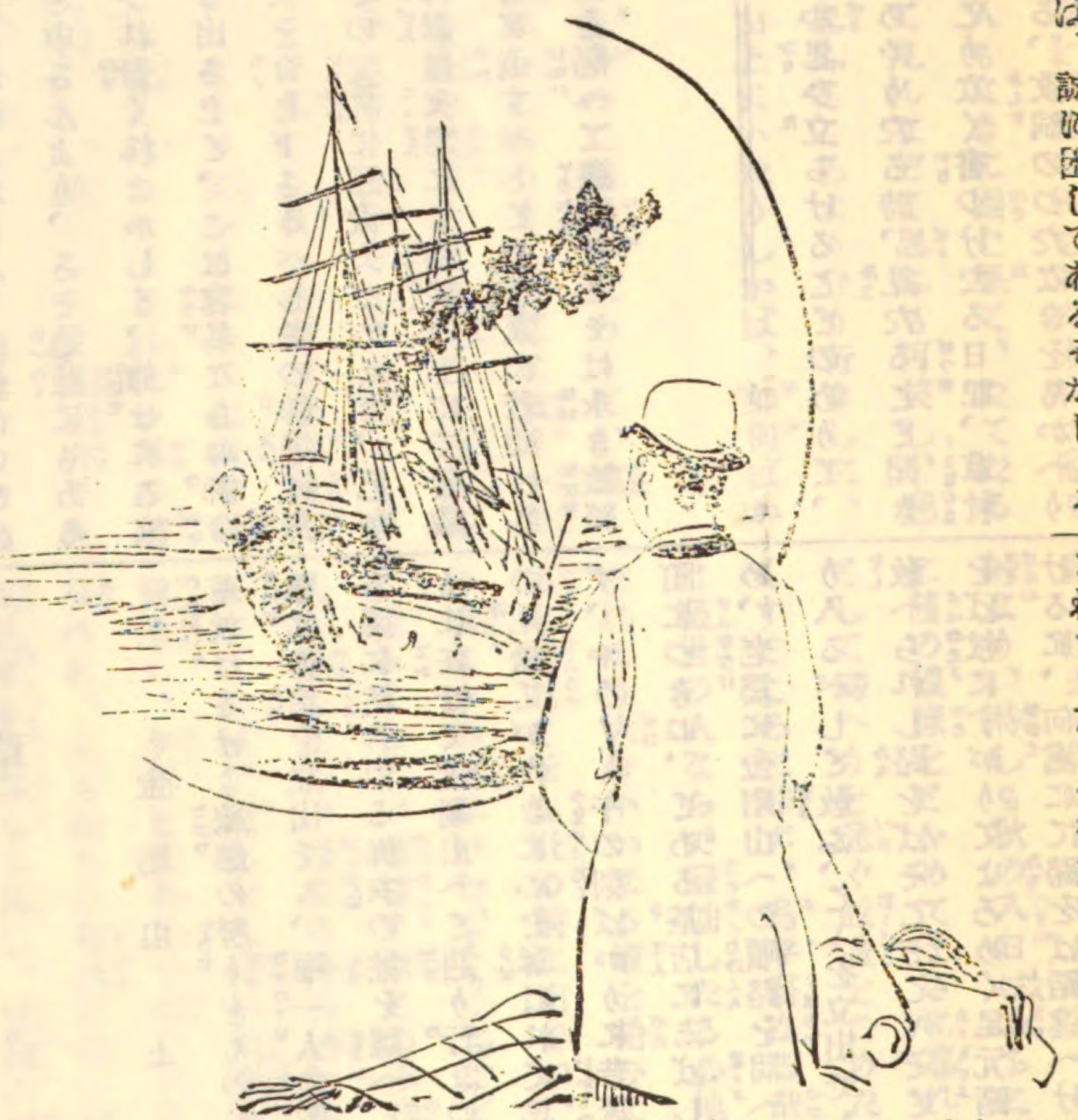


なりしにや、二人にむかひ、きのふよりそち達ち二人の親切に危ふき場所を助かりし、厚意のほどぞいかにして、謝すべきや我れは、都の中央に住む伯爵某の子なるぞやきのふは天氣もとにうるわしく、晴れし景色に心もいさみ、いづこともなく、野に山に駒をかりつつ日暮になるも打忘れしに驚きて家道をさして急ぎしにいかなる、はづみか我が馬は途の邊の石につまづくよと思ひし後は今までも夢に夢みる心地のみ我が兩親もさぞかし心を痛め給ふらん疾く、電報をうちてよとの頼に老父はかしこみて出で行ぬ、約を違へず、醫師は來て手術を濟せ歸りける、跡に娘は病人の心を慰めんとて四方山の咄しに時のうつるも忘れ、老父の歸るに心づきて話を彼に讓りける、其日も暮れ近くなりたる頃、轔々と車の軋る音して門口に、とゞまる馬車、ほどもあらせず入り來るは五十前後の氣高き夫人、老父は見るよりとびすさり、何方よりの御入來と恐る〳〵たづぬれば、馭者は傍よりこれこそ某伯爵夫人なれ、昨日の夕御召しの馬のみ歸りしも若殿は待てども〳〵、歸館なくいかゞは遊ばされけんと御心配一方ならず、今しも届く電報に取敢ず、御出ありしなりと、ありければ、老父は打驚ろき、かゝる田家も御厭ひなく御出たまふ御心中御尤もの御事にこそ、とく〳〵御對面あれかしと、病床へと導きぬ、夫人は一目見るよりも涙を浮べいかにして、かゝるけがばし爲しつるか、父上も大方ならぬ、御心配共にと思ぼし召しけるも、知らるゝ如く御老躰にて、ましませばわらはに、早く往きてよと、せきたてたまひ出入の醫も跡より、來るならん、ときく若殿は有難かりき惠やと、心のうちに幾度も謝しつゝ語るきのふの有樣と思はぬ、親子が親切の話に夫人も家令とも、うち感じつゝたぐひまれなる者共と深く感賞なしにける、またも車輪の音高くとまるや早く入り來る、伯爵家附の醫師、やが

て容躰具に伺ひて夫人にむかひ申様、土地の醫師の診斷もおのが診斷とかわりあらず、いますこしにて、動かしたまはゞ、爲めにいと悪し、田家の御不便いかばかり、誠にお氣の毒なれど今暫く御辛抱こそ大切なれ長くもあらせず候へば、志ばし御志のび候べし、ときくに夫人もせん術なく、跡の事ども懇に親子のものや村の醫師に頼みてこそは歸られける、されば若殿は起きも叶はで病床の中何樂しみもなけれども小女が夜となく、晝となく、傍をはなれず慰めまひらする心に感じ、小女をのみぞ力ともなして幾多の日を經るまゝに、追々快方なし今は歩行もまゝなれば、醫師も都に歸りても差支なしと斷じける、されどいかなる故やらん金殿玉樓の大家よりは賤が伏屋の樂しきにや、迎ひに來る三太夫に、あすはとちかひ、兩三日中と約しつつ無駄足をぞ、させてける、日毎に通ふ三太夫は、少し腹立て且つ不審の念を生じ、夫人に申上る様、若殿には如何遊され候や御病氣も最早御全快あそばせば、先日より御歸館をと、勸めまつれど、その甲斐もなく誠に困じ果てゝ候、如何致し申さんと言へば田舎は空氣のよろしければ、心のまゝに、なし置くべし、されど先頃より某伯の令孃を貰ひ受くべき内約あれば歸り次第にこの事を申きかせ早く初孫の顔見て安心したく思ふなりと、夫人の仰に三太夫は誠に結搆なる御事なり、早く御はこび是有るこそ、若殿の御身のためなんめれ、あすこそは、かならず御歸館との御約束なれば某早朝より、又こそ御むかひにまかり出づべしといと嬉しげに御前をぞ退きける、こなたは若殿彼の親子の者とまどひつゝ四面八方の物語り、げにこの世の事は何事も意外なり、はからざりきそち達のたすけを得て、宿るも深かき因縁にや、地位こそかはれ心には厚き情けに眞實の親兄弟とも思ふなり、いかに貧しく暮すとも滿足、耐忍が緊要ぞ世は何事も塞翁が馬なりけ

りなど語りなどして、夜の更るをも知らざりき、明る朝となれど、まだ、起きやらぬ、田舍屋の門口に、いといかめしく作りたてたる二頭の馬車、とまるを待たで、三太夫御用意よろしく候はゞいざ御供仕らんと聲高らかに、呼はつたり、せき立てられて、若殿は心ならずも用意をなし、朝げもそこ〳〵別れを告げ止む事なしに馬車に乘れば、心せはしき三太夫、仕すましたりと喜びて、馬に一鞭加へつゝ車を早め急ぎ行く跡見送りて、親と子は影見ゆるまで、別れを惜しめば、若殿も馬車の窻よりふり返り、見送りて、互に涙をぞもよふしける、幾多の高樓は雲間に聳へ車馬絡繹として絶へ間なく、四通八達限りなく繁榮極めし、大都會別けて美麗の一區畫、其中にもいかめしき家構へ、御歸りーと一聲高く供ぶれにまちもふけたる館の人々一同出でむかひ、御機嫌伺ふ其の有樣、かまびすかりける事どもなり、これぞ、かの伯爵家の若殿が田家よりの歸館なる、其夜は知己親族を、よび集へ、平癒の祝宴いとにぎわしく催されけり、其後若殿はいかゞしけん以前にかはり、勉強もなさず、又外出もせず、たゞぶらぶらと打ち沈めば、母なる君は、いとゞ心配なし給ひ彼の家令に申付、散歩外乘なんど進めたまへども心地あしとて、出でたまはず、たゞかの田舍の事のみ、折にふれては、語り出でらるゝを聞くにつけても三太夫は、心のうちにあやしみける、或日の事夫人は彼の伯爵の令孃と結婚の事を打明くべしと懇に説きすゝめたまひしかども若殿は更に受け引く景色もなく、却て不快を增す鏡、くもり勝にて暮しける、夫人は痛く心を勞し給ひ、三太夫を近くまねき、他事ならぬ子息が事そなたも知る通りかの田舍より歸りて後は何か志きりに、案じがち外出もせず勉強もなさず、さりとて又病氣の樣にも見えざるは、いかなる原因ありての事か、尚又例の令孃を迎へんと語りしに以ての外に忌嫌ふは

更に其の意の知れざれば、誠に困じてゐるぞかし、そなたはあれが、おさなきより、側にし居れば事によせて、其の意をさぐれよ、心當りもあらざるか、と子故にまよふ親御の心中、とはれて三太夫は打うなづき、さん候申すもいかゞに候へど若殿田舍に御療養中の有樣とい へ今の御咄しにつきては、少しく訝うたがひの御座候、察するに、彼の田舍の娘に心を掛けさせ給ふにや候はん、



されど、たとへ御意には叶ふとも彼が身分といひ育ちといひ、何條交際社會に出さるべき、とは全く一時の御まよひにて候ふべければ暫時の間常々若殿御希望の洋行にても遊され候はゞ、たちまち其念も覺め侍らんいつまでかくて置き給まはゞ、御家の大事とも相成べしと、口とがらして申上げれば、夫人もなるほどそなたの云ふ通りそれならば病氣保養のためとて、暫し遠國旅行に出だ

すべし、然よかるべきとのたまふに、三太夫、夫こそ誠に結構なり御供には、誰れよからん、彼れはいかにと、勘考中誰れ彼れと申さんより、さぞ迷惑にもあるべけれども、そなたつれ行くれよかしと、仰せにこなたは、嬉しさを顔にも出さじと、こは容易ならぬ御命令不肖の某より、餘八を命じ下さるべしとの辭退は無用早速用意致すべしとの命に三太夫はいそぎ、己が部屋へと下りける、母君は父君にも相談の上にて若殿に日頃願望の如く洋行に遣すべしとの言葉に若殿は心ならずも、三太夫一人を隨へて遊歷にこそは永き旅路に赴きける。

過ぐる年いさゝか思ひ立ちけることのありて、關西の地方をこへめぐりたる時、見たること聞きたることゞものこりなく書つけたる日記、草枕となん名づけ侍る、文詞のつたなきをもかへりみず、今こゝに其の一節を抄す

草枕

冷月生

金剛山上

草枕はるけき旅路の勞りをものともせず、朝早くより畝傍の宿を立出でゝ、唯一人金剛山より辷り落る涼けき風に汚れたる征衣の袖を飜へして、一本の杖足の行くに任せて金剛山へと辿り行きぬ、道すがら秋の景色の見捨てがたきに心を奪はれて思ふやうには足も進まず、やう〳〵午の刻ばかりに昔床しき名の御所と云ふ町につきぬ、とある茶店にしばし憩ひて晝餉をしたゝめ、老婆に金剛山への順路を問へば、風の森と云ふより入るべしと敎ふ、こゝを立出で右へ折れ左へ屈り、敎へられし路をばそこぞこゝぞと、いとゞ嶮しき山路をば杖にすがりてよろめく足元蹈みしめ〳〵登り行きけるに、何處にて路をば蹈違へけむ、金剛山よりは遙

かに南の方に出でぬ、道を問はんにもあたりに人家も無く折悪く通りかゝる人もなきに困じ果て、たてたる杖の倒れたる方へ行きて見んなぞと思ふも可笑し、憩ふこと少時、こゝぞと思ふところより登り行きしに、幸に迷はで夕陽の頃山上にいたりしかば、如何ばかり嬉しかりけむ。

瞰下せば、近くは大和紀伊の二國眼下にありて、遠くは伊賀伊勢の國々一望の中にあつまり、東は山下一面見渡す限り水田茫々、黄金の波打たせて童の蝗追ふ樣も手に取る如く見ゆ、東南は山少くして吉野より西は嶮しき山々空兀として、名にし負ふ吉野川の清流白布を晒す如く山によりて見えつ又かくれつ、西南を望めば稲田の上をさまよふ鷺に似たるはこれ紀の川の歸帆なり、西は金剛山の足にて見渡すかぎり山又山、西北よりは山少くして河内の蓮田はるかに見ゆ、北に向へば一の高き峰ありて、此の山との間を劃りたる低き處、樵夫の柴を背負ひて歩くあり、これなん水越しの峠なり、時しも秋の入日はおちこちの山の頂峰の面に茜の模様をとゞめてまさに暮れなんとし、淡靄模糊として歸へりを急ぐ牧童をこめたる景色、描き筆の盡くすところに非ず、嗚呼壯なる哉、嗚呼壯なる哉、身は塵世の人ならで登仙したる心地ぞする。

それより大きやかなる道を拾ひて奥深く分け入りしに葛木神社と云ふ社の前に出でぬ、打見やればそもいつの頃よりか廢れけむ、とりこぼちたる材木は庭上に堆く積みなして、唯柱と梁とのみ殘れる有樣荒涼として見る影もなく、麋鹿の通ふ跡のみ見えて詣で仕ふる人もなければ、荒れたる庭の草思ふがまゝにはびこりて露深く、夕べをも待たで喞く虫の音の身にしみ〴〵と哀れに、名も知らぬ異鳥の鳴く聲いと物凄く、尾上の風慘憺恨を訴ふる長し、感慨の情胸に迫りて涙禁め難く興廢は世の常とは云へ、如何なれば此の有樣ぞ、借

問す神魂去つて今何處の空にさまよひおはす、歸らせたまへやとゝに一人優しの男の子の候ぞと、庭面に咲亂れたる草花手折りて供へうけさせ賜へやと社頭にぬかづきて去りもやらず、時に後に當りて幽に人聲の聞えければ、斯くなりても昔忘れず詣で仕ふる人のあるにやと訝しく、見返へれば年まだうらわかき二人の少女、刈りたる芝を束ね居たり、同胞にやあらむ、不計我方を見返りて小腰を屈めたる其けはいの草刈る身には似もつかで優にやさしきに、如何なる人の娘にやと床しき心地のせられて物云ひかはしたく思へど、物慣れぬ身の流石に云寄りがたく、惜しき名殘りを割きてやをら西の方へと去らむとせしに、定めなき秋の空のいつしか掻曇りて雨はげしく降り出でたれば、如何にせんとうろたへ居る處へ、少女の馳せ來りて、旅にての俄雨さぞ心細くな思したまふらむ、いぶせき住ひなれど我庵に宿りたまへと云ふ、地獄に佛とは斯る時にこそ云ふべけれと嬉しさ限りなく、後に從ひて行きたるに、さても破れたる一棟の家、志ばし待たせ賜へと少女は内に入りぬ、斯くても鬼神ならぬ人の住みけるよと呆れて立ち居たるに、少女は水を汲たる盥を持來りていざと計りに侑ければ、足洗ぎてにぢり上り、家の樣子を見るに、此少女の外に小供ありて、五十路に近き老母と下男とも見ゆる老爺一人あり、家は宿坊と覺しき造り方なれど本堂はすでに形もなく、庫裡とても名ばかりにて屋根は半ば落ちて唯朽ちかゝりたる床あるのみ、疊は奧の間に二帖あるのみにて他は皆板をならべ、其が上に古びたる蓙筵を布きてあり、荒涼又荒涼、名工の畫ける廢寺の畫をまのあたり見るの心地せり、やゝありて少女と共に老母の入り來りてもてなしくるゝこといと厚し、主人はと問へば、折惡く留守にて客人がはるけき旅路のつれ〴〵を慰めまゐらすべきよしもなくいと本意なしと云ふ、舊家と見參らす

器物等多く候はん見せたまひてんやと云へば老母は微笑て、數多候ひしが今は皆博覽會へ出し候て殘れるは僅に侍る。いで貴覽に入れ參らせんと持出でたるを押戴きて見るに、第一は、楠正儀の所持せる劒なりとて、長サ二尺餘り、銘は身の眞中に、紀州根來寺鍛冶友次作の十二文字を刻みあり、惜むべし眞黑に銹びて光るところとては少しもなければ、やき、にへ、にほひ等の工合見ること能はず、鞘なくて百年も經たらむと思しき竹を割りて之に納めあり、次は葛木神社由來緣起の片々、次は嵯峨天皇の御宸筆、いたくくすぶれて文字の見難きにすかし見れば、絹地に楷書もて筆太に、春日大明神の五文字、躍るが如し。

金剛山下

談笑の間つぶさに老母の風采を見るに、端正にして鄙野なるところなく、言葉づかひ優美にして此の地の訛りとては少しもなく、笑顏豐かにして、數多の下婢下僕を頤にて使ひし其の昔のすゞろに忍ばれて床し、傍に坐せる二人の少女を見るに姉は年の頃二十許妹は十七八と見ゆるが、共にかゝる鄙には惜しき容色にて、更に裝ひ飾りとてはせざれど天然の美玉は隱さんとても光隱れず、たとへば姉は東籬に咲ける白菊の香靜かなる風情ありて、妹は深山に咲ける一本の梅床しき色香の犯し難き姿あり、共に學びの道に迂からぬは、優美なる言葉の端と法に叶ひし作法とに推測られぬ、世が世にしあらば姫御前と數多の召使ひにかしづかれ、綺羅を飾りて荒らき風にも當らず、出るに輿あり入るに籠ある榮耀榮華、絲竹かなでし優しの腕に草刈鎌の柄握るとは夢にだも見ぬ、嗚呼哀れ夢なれや飛鳥の川の淵はせと移りかはる味氣なの浮世、いかし往にし昔の忍ばれて戀しかるらむと思ひやるだに涙いと深し、かゝる人達の夫と呼ばれ父と呼ばるゝ此の家の主人が風采左こそと思ひやられ、親しく膝を交へて語り明か

さば如何ばかり嬉しき事ぞと、床しさ慕しさかぎりなく、今宵留守なるこそ世にもこよなき恨なれ、一樹の蔭一河の流れもこれ他生の縁とぞ聞き侍る今日ゆくりなくもかくの仕合せ、豈宿世の因縁なからでやは、何んとなく御昔の忍ばれて床しうこそ存じ候へ、くるしからずば由緒のほど語らせ賜へやと問ひける、無慘や我問ひはいかに老母が胸を打ちたりけむ、擡げし首の俄かに下りて、露かあらぬか潸として落る白玉膝に當りて碎くるを見る、よしなき事を云ひけると悔む我面持を夫れと悟りたる少女のそと袖をひくに老母は心附き世にも嬉しき問事に昔の樣の胸に浮み出で不覺の涙にくれ侍りぬ、許させたまへや東の客人、過にし昔を追ひ死したる子の年を數ふるは何れ詮なき事に侍れど、夫は大宿坊葛城貞純とて代々葛木神社の司掌、昔は下寺の五坊も侍りて人らしき烟も立て侍りしが、定めなき世の常とて、今はたゞ本坊のみ殘りて他はとりこぼちて跡もなく、入り來る財とては少しとなければ、見らるゝ如く破れ果てゝ本坊とは唯名のみ、雨露さへいとゞ志げくして夜な〳〵月星の光りを宿す廢寺の姿となり侍りぬと語り終りて老母は愁然と首を垂れたり、さらぬだに涙の滿ちたる我胸は哀れなる此物語りにいとゞ思ひのいやまして言葉はこゝに絶え、軒端を過ぐる風の音寒く、後れて栖を急ぐ鳥の聲淋し、よしなき物語りに時を移せしものかな、空腹にぞおはすらむ、いざ夕餉を參らせんと老母は立ち去りぬ、唯一人影ほの暗き燈火の下悄然として腕拱けば、千々に湧出る感慨の情心膽を寒からしめ落ちたる壁破れたる戸障子、吹き入る風の隔ともならで、雨に濕ひ涙に濡れたる征衣の袖いと寒くして、堪らえんとすればいよ〳〵堪らえ難く、打顫へて齒の根の合はざる樣可笑し、やゝありて暖き情けの夕餉を運び來りしにぞ、腹ふくるゝまでたうべたればやゝ暖くなりて蘇生したる心地ぞ

さる、當山の下廿五町の處に千早城あり、明くれば早く行きて英雄の古跡をとぶらはんと思へば寢心地よし正成公は多く此の山にのみ居りて戰のかけひきをなしたりと云傳ふと老母の云ひける。

五　堪　忍

五堪忍といふことあり、聖賢の旨趣より出でゝ、世業を爲すの甚、人間安穩の大悟にして修身齊家の樞機なり、之を守る時は勞する事なく、家富み榮ゐ、是を守らざる時は亡ぶ、衣服は何の爲にか着る、寒さを凌ぎ暑さをいとはんが爲なり、さあれば寒からず着、暑からず着ば、麁服にても厭ふことあるべからず、美服に奢るは、いまだ寒暑の身にしまざるが故なり、寒暑の身にしみなば、縫、裸にてもいとふものあるべからず、食事は何の爲にかする、空腹をやめんがためなり、さあらば、添物はなくてたりなん、添物なくて食の進まざるは、いまだ飢の至らざるなり、飢の至る時は糟糠をだも嫌はず、家は何の爲にか作れる、雨露をいとはんがなり、さあらば、無益の造作などなくてありなん、水火の災に家を失ひし人の軒端にても厭ふものあるべからず、妻は何の爲にか持てる、子孫を嗣がん爲なり、さあらば子孫あるものは妾などもたであるべし、妻子あるが上に妾を持つは色に溺るゝが故なり、財は何の爲にか求むる、世計の第一、衣食を足らしめんが爲なり、さあらば義をかき、恥をも忘れて、貪り貯ふるにも及ぶまじきことにこそ(柳澤淇園)

實談

近藤勇の少年時代

中野三鷹子

今の東京府下北多摩郡三鷹村のうちに、大字大澤といふところあり、茅屋點々稻田桑畝の間に亘り、其數凡て七八十、山清く水亦清し、稍桃源のおもむきあり、此處ぞ幕末の偉人物、新選組の隊長近藤勇昌宜が、呱呱の聲を上げたる地なり。

勇が父は其名を宮川久二といひ、村に久しき農夫なり、家甚だ富めりといふにあらざれども、秋收冬藏に一家飢を知らず、性質豪毅朴訥にして漸々文字を解す、(古老余につげて曰く彼頃にしてよく四書を讀み得るものは村中において彼たゞ一人ありしのみと)同郡回田村に是も亦久しき農家の娘、何某といへるものを娶りて夫婦相和し、家をつぎ亡父の名を襲ふて源次郎と改む、

三男三女を上げしも女は悉く夭し、男はいづれも恙なし長を音五郎（後家をついて又源次郎と改むつれ合の老母今猶壯健なり）次を粂三郎（出でゝ他をつぐ）といふ而してそが第三男こそは、即ち勇昌宣なり。

勇六歳の冬、母は病に倒れたり、唯さへもいと事多き農家、年も行ぬ三人の子を擁いて、父の身のいかで自由に働き得べき、內助のなくばあるべからずと、親戚の人々はいふも愚、そが鄕黨朋友のたれかれまで、懇懇とぞが續弦のことを進めたりしも、幼兒等を繼母の手にかくることの不便なりとて、無下に退けて一もきくなく、耕耘より薪水の事に至るまで、盡く是を手一つにてなし、不自由勝の其中に三人の子を養育せり。

村落には寺子屋さへも思はしきものゝあらざりければ源二郎そが三子を耕耘の餘暇膝下に集め、いろは名頭よりたどり行く筆の步を敎へ、實語敎の初より、讀書の道を授けたり、（されば後來に於て、勇八方に奔走し、或は公然の又は私の書信など、處々に散在せるを見るに手蹟あながちに見苦からず、是皆父が傳へしものと見て可なり）。

家に傳來の古書いろ〳〵あり、其內父の尤も愛讀せしは、通俗三國志の一本なり、每夜每晩、雨にも風にも怠ることなく、三子を前に並置き、その初より順を追て讀みきかせ、汝等三人は此義兄弟を以て手本となし、苟にも不和なとの事あるべからず、俱に〳〵助けあひ必ず立派なる人となるべし、男子たるものゝ身に取りて、百萬富より優して尊ときは、げに義といふ一字の外なしと敎へたり。

されば幼き耳にはいとむつかしき事に思はれ、初の程は話半にして眠り終りし事もありしが、次第〳〵心に染み行き、後にはいとゞ面白き事に思ひて、日の暮ゝことを待遠しがるに至れり、されば父にもいよ〳〵力を入れて前後數回、讀終りては初にかへり、再三再四

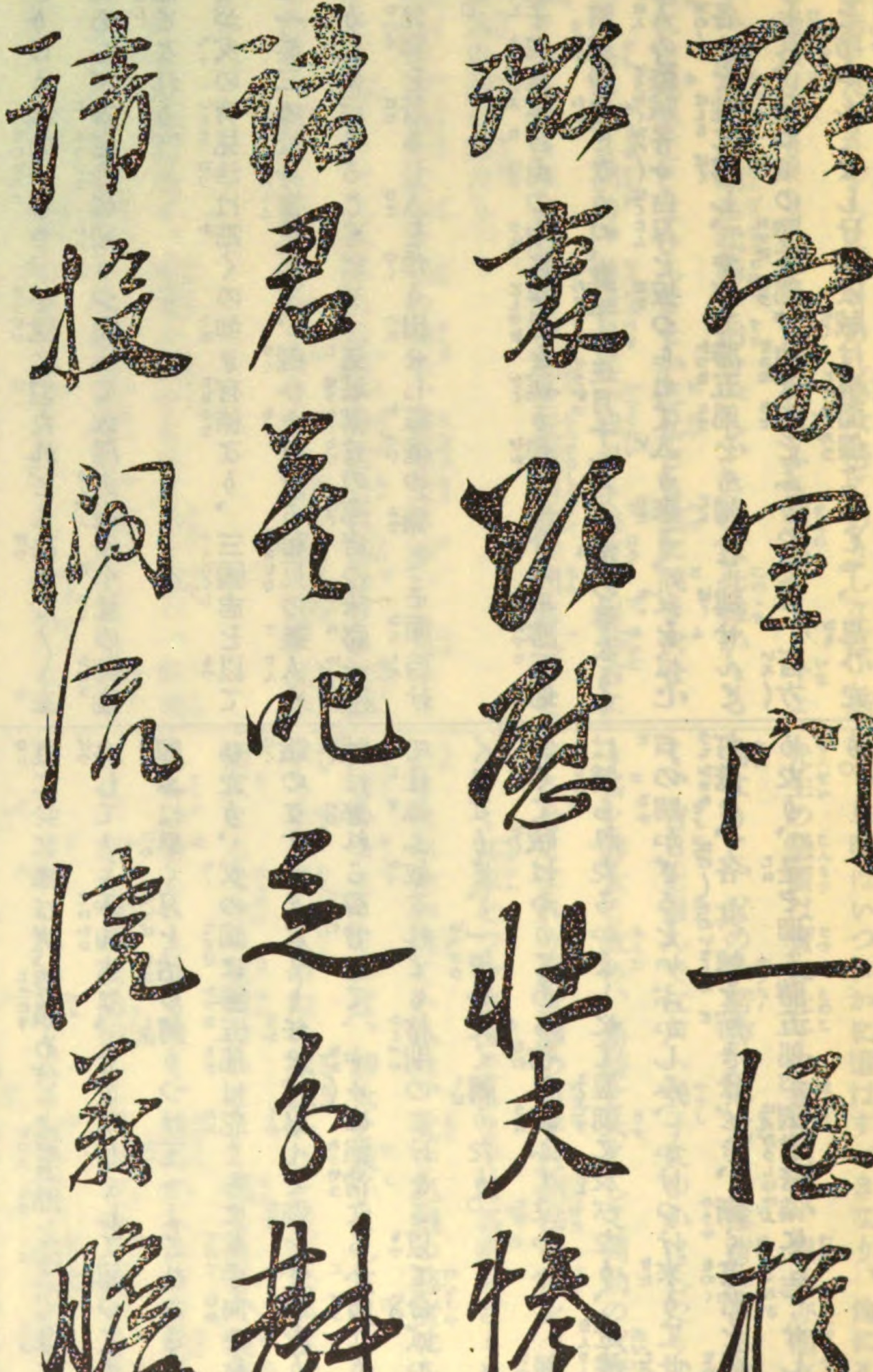
年を重ねて復讀してこそ聞かせしかば、興は回一回と加はり行き、三子は是に上こす樂しき事はあらじと思ひ、末は各々其中の三人を以て自からに擬するに至れり。

かゝる有様にて敎へられた兄弟三人は、いづれもともに日に增し強くなり行きて、村第一の惡太郎、人を人とも思はず縱横濶歩なせしとの事、古老について傳へ聞けば、宛然にクライブ、の生立ちし日に似たる節あり。

其中にも取別けて、勝五郎《勇》は尤もいたづらにして、父より外世に恐ろしき人とてなく、父に叱られ懲さるまでは、己が心のまゝに振舞ひ、仕度き事して荒れまわれり、其時分の事については種々樣々の可咲き節の多けれども、そを一々に云ふは要なし、唯々一つ已に呑牛の氣をあらはせる條を記さんに、同村の何某が家に大なる杏の木あり、枝年古りて果實もつとも甘く、年々に多く實れば持主の人は我子のごとく大事にかけ、唯々其みのりの時をのみ、待暮し待明せり、此年も花實例のごとくに時を誤またず、枝もたはゝに實りければ、烏を防ぎ虫を防ぎ、注意をさ〳〵至らぬ隈なくいよ〳〵黄熟の時とはなれり、或日持主の人は所用にて外に出で行き、歸り來りて見ればこは如何に、最愛の杏樹、實を落され又枝を折られ、散々に荒されたりしかば、殊の外に驚きかなしみ、こは何物のかくはなせしと、八方にかけて問ひたゞせしに、今日晝過る頃なりけり、勝五郎多くの子等をひきひて來り、自から枝に登りてかくはなせしと告ぐる人のありしに、さなるべし〳〵我も亦大方は然推せしに違ふことなし、勝の野郎にあらずして誰か斯る惡戯をなすべきと大に怒り、直ちに馳せて彼が家に赴き、此事を父源次郎に語りければ、父は何と詫びん詞のなきまでにいと氣の毒に思ひ、種々樣々といひたあやまりにあやまりて漸

く其人をかへし、其後勝五郎を呼んでいろ〳〵と事を別けて折檻なせしに、勝五郎は平然として答ふるやう、かくまでに叱らるゝ程の事にもあらず、思ふても見給へかし、彼の杏の樹は彼人の家の周りにありといへども、よく〳〵事を考へ見れば、彼の地面は元々かれが地面にあらず、皆是公方樣の地面ならずや、我今の中こそかくてあれ、やがて年取たるの後は世に出でゝ立派なる士となり、適れ公方樣の御役にたゝん心なり、されば我こそは公方樣の臣なり、其臣なるものが主人の杏を食ひしとて、公方樣には叱られもせん又は御手打になるとても、更に言分はなけれども、彼の人ごときにあやまるべきの筈はなし、彼は畢竟杏の番人にして我に食れしやくめの緩怠却て叱らるべき筈なり、されば又々怒りて來らん時我に於ていふべき事あり、父上には必ず〳〵出玉ふなと落つき拂つて言ひしかば、父を初め二人の兄其他きゝ居し人々は何れも互に顏見合せ何の詞もなかりしとぞ、誠や蛇は寸にして其氣を顕はす、豪傑の生立 筍の內より知るき弓の竹なり。

或時の事なり、かゝる强膽の勝五郎いとも悲げなる面持にて更に日頃の勇氣なく食事さへもろく〳〵に進まざりしかば、父は大ひに心配なし、勝よ手前は何とてかくもげんきなきぞ、何處があんばいでもわるきにあらずや、御醫者樣にても見てもらはずやと、尋ねしに否とよ決して左にあらず、何處もわるきふし一つもなけれど、唯々悲しき事のありて如何にも心の浮立ず、飯も自から進まざるなり、と答へたり、父は更に詞をつぎそは又何が悲しく然るぞと問ひしに、さればなりとよ父上、一昨夜よみ玉ひたる例の三國志に關羽は遂に死せりと聞けり、全躰我等三人の兄弟父の仰の如く三人を以て身の手本とし、我を關羽兄達二人を張飛玄德と定めたり、その關羽の死せし如何で悲しからざるべき孔明も亦あたら軍師の席に居ながら何故死地に落



せしぞや、と聲はりあげて泣き倒れ暫時は起きも上らざりけり。〔此一事や、小説に似たれども決して〳〵左にあらず古老今に語りつたへて大澤近邊の小兒の御伽話となれり〕

そが父の育兒法は斯くの如き有樣なり、三國志を以て唯一無二の修身書として、鍛ひ上げたる稚兒の義人となりしにはさることにて、孤城落日の幕府の末路一種の光彩を放ちし人を作り出せし家庭の樣こそ面白けれ。

親子四人不自由の中に年月を送り迎へて今は早勝五郎十四歳の童となりぬ、其年の正月十七日の夜の事なり、數人の盜賊各々白刃を拔つらねて入り來り、父をはじめ各々を柱に縛し、やがて勝五郎をも捕へて縛せんとせしに、負ぬ氣の勝五郎、幼き腕をふりたてゝ、百方そを防がんとなしければ賊は事面倒なりとや、思ひたりけん、いよ〳〵白刃をふり上げて、今や眞ッ二つにもなさんと見えたり、縛られたる父は其樣を見て魂更に身に添はず、聲張あげて勝五郎を呼び、危なし〳〵決して〳〵手向すな、をとなしくして縛つてもらへ、願ふは早く刄を治め縛りつけ玉へとひたさけびに叫ひたり、父の詞に勝五郎は忽ちに其手向ひを止めて賊のなすがまに〳〵任せ、忍んで繩を受けたりけり、賊は怒れる聲音にて、中々に强情なる小僧なり、殺して仕舞ふ奴なれども格別のなけをさ以て命ばかりは助くるなりと、一層かたく縛りたり。

かくて賊はありとある物を奪ふて立かへり、親子四人は縛られたるかまゝにて翌朝に及びたり、近隣の人々戶の明かざるをいぶかしみ、かけつけ來りて此有樣に打驚き、各々其縛を解きほどき、漸く其苦を免かれしめたり、是ぞ即ち勝五郎が劍道修業に志せしの初なり。

强情なる勝五郎、賊の手込に逢ひしとのいかにも〳〵

口惜くて、其翌日二人の兄にむかひていへらく、劍法柔術をたとひ少しにてもあれ學び得てありしならば、斯る耻は見ざりしものを、如何に思ふも殘念なり、今より一意專心に劍法柔術を治むべし、されば此後かゝる耻には逢ふことなけんとそか二兄をも遂に說き伏せ、三人共に同日同時、其頃月に一回づゝ地方へ出稽古に來りつる江戶市ケ谷柳町の劍士近藤周助の門に入りて師弟の契を結たり。

其後は嚴霜骨に徹す冬の朝も、炎熱金を溶かす夏の日も更に屈せず、兄弟三人の同士討試合に術は日に增進み行き、敎ふる近藤周助も來て見る度々其上達に感心せり。

されば近藤周助も、非常の熱心を以て術を傳へ、師弟の意氣ともに相投合して敬慕慈愛の念兩者に間に相增し行き、遂には養子にもらひ受けたしとの申込とはなりたりけり。

末子の勝五郎いつ〳〵までも父の側に置くべきならず、早晚はいつれかに遣はすべきなり、他にもあらぬ先生の懇望は實に此子の譽にして、我も亦面を起す次第なりと、父の承諾勝五郎元より違背のあるべき筈なく、吉日を選んで江戶へ養子につかはしたり、此時より名を勝太と改め、島崎を氏として周助の代稽古をもする身となれり。（近藤の苗字は劍法の傳をうけつきいよ〳〵其家をつぐに極まるまでは名乘らざりしと）

然るに周助が妻といふは、元牛込邊の藝者にして、無敎育の女なりければ、勝太を養子として見るとなく、寧ろ年季奉公人の如き取扱かひをなせしかば、勝太は義父なる先生の慈愛はいと〳〵嬉しきも、義母の虐待に心の晴るゝふしもなく、面白からぬ日を送るにつけては一家和合の故鄉戀しく、怏々の念こりて遂に病をなし、日につれて重くなり行けば、保養のためとて大澤に返り、地方の醫白鳥某にかゝりしも、かつてよき

めも見えざりしに、其頃の御典藥伊東玄朴此地に來たる事ありしかばそが診斷を請ふて服藥せしに、日ならずして本復せり、父源二郎はいたく喜び早速江戸に送りゆきたり、義父も亦今更に死ゝたる人のかへりし思ひ、やかて妻を迎へて家を讓り初めて近藤勇とは名づけたり。

是より後のことは明治維新の史にくはしく、今更いふべき要もなし、唯其妻の事繼嗣のこと及び處刑後の事幷に近藤勇と尤も關係ふかき土方歳三のことなどは、世に知られざるふし多しそは又時をかへて語らん。

男子兒を胎む

英國スタンダード新聞の墺國維納府通信を見るにチエヘ大學の教授マイドル博士は醫學上最も珍らしき施術を行ひたるよし患者は本年十九歳の學生にして幼時より其脊骨の下部に瘤樣のもの發生し苦痛に堪へず終に堪え兼れてマイドル博士に治療を請ひしかば博士は下腹を切開して病源を詮索せしに脊骨と腸との間に頭こそなけれ他は充分生長して肥え太りたる上に毛髮さへ生へたる胎兒あることを發見せり此施術後少年は次第に快復するの容子なりしが二日程過ぎて死亡したり博士の説明する所に據れば少年と胎兒とは元と雙兒にして何か原因ありて一は生るゝを得ずして他の體中に宿りしものならん又この胎兒は女性にして二つの膜を以て少年の身體に密着するが故に彼れの食する滋養物の幾部は此寄生兒に奪ひ取られ常に衰弱を憂へ居たりと尚ほ頭の在る可き場所の邊に在りし毛の長さは一尺三寸餘又切開して取り出せし時に胴の長さは殆ど五寸ありしよし博士は此奇妙なる現象を醫學者の集會せる席上に於て説明し更に死體を解剖して一層研究する所ある可しとなり

叢談

姑の話(上)

A B 子

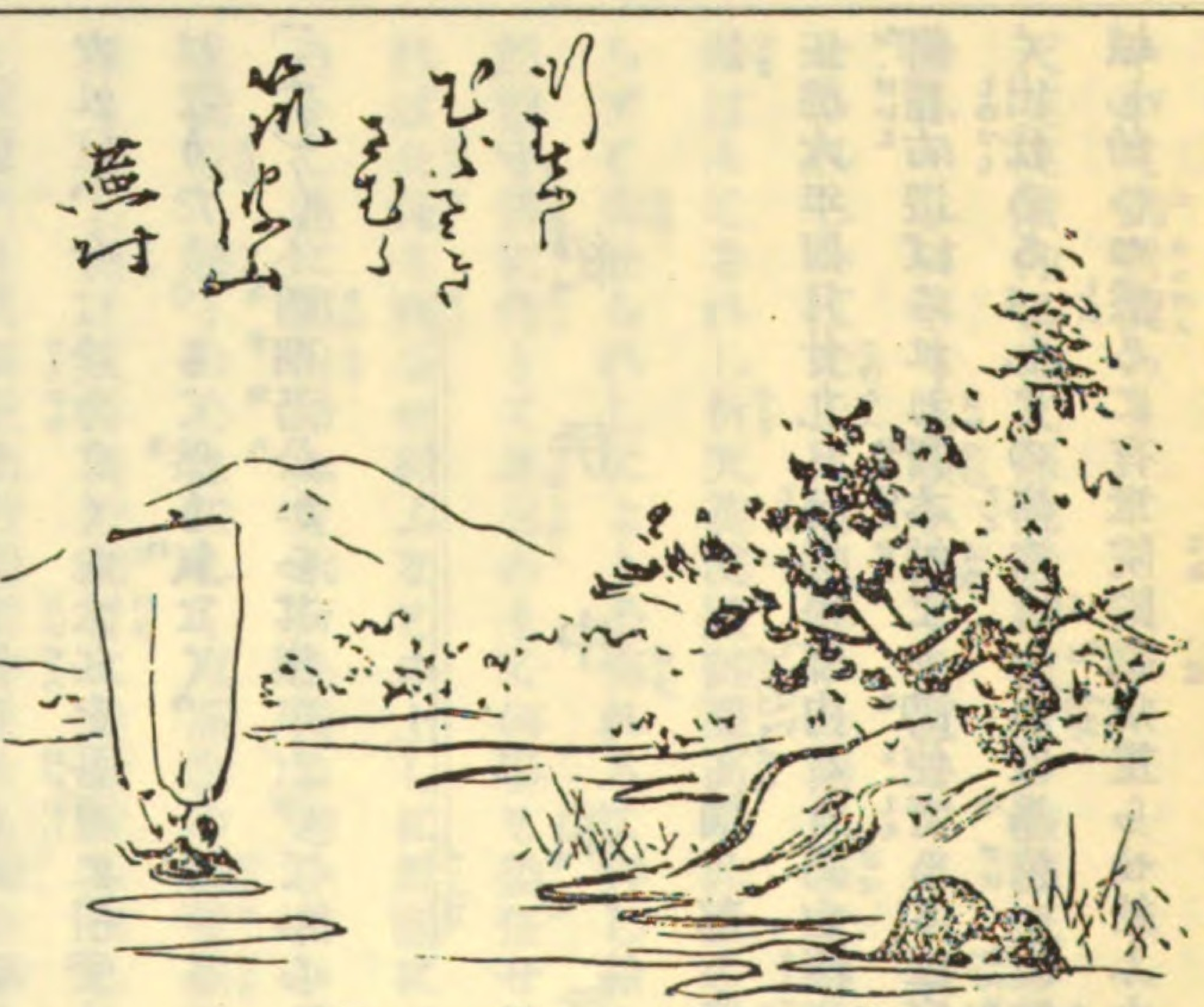
「有躰に云つた所が、お花、お母さんにはドウしても歸つて戴かにやならぬ。モウ乃公は決心したよ」。

斯く言ひ出したる時、妻の兩眼見る／＼涙ぐんで來た

れども、斯く言ひ出すまでには千思萬考を費やしたることなれば、此機會を逃がしてはと思ひながら、そしらぬ風にて、「イヤサ、ドウしても歸つて戴かにやならぬのだ。まあ積つても見るが好い。お前と結婚して早や三年になるが、丁度結婚式の濟んだ翌る日の事だつたお母さんが娘もまだ世帶持に馴れぬから加勢かたがた五六日逗留にとて御出になつた。乃公も有躰の事はちと二の足蹈んだが、併しまだ無經驗の事ではあるし、お前も便なからふと思つて、どうぞ御出下さいましと申上げたのは好かつたが、偖御約束の五六日は立つて仕舞ひ、一週二週一ト月二タ月立つても一向御歸りの樣子もなく、つい三年と云ふもの居續けになさつたのだ。そこで乃公が思ふにお母さんの御逗留は眞に有り難い、しかし甘い物も食べ過ぎると却て迷惑と云ふ樣なもので、最早お前も乃公も大分世帶の事には馴れて來たから、其樣何時までも手引かれてばかり歩むで居ない方がよからふと思ふのサ。だによつて、何回となくお母さんに其事を遠まはしに申上げて見ても頓と知らぬ振りで居らつしやる。是では困よ。失禮ぢやあるが仕方がないむき出しに申上げずばなるまい。」

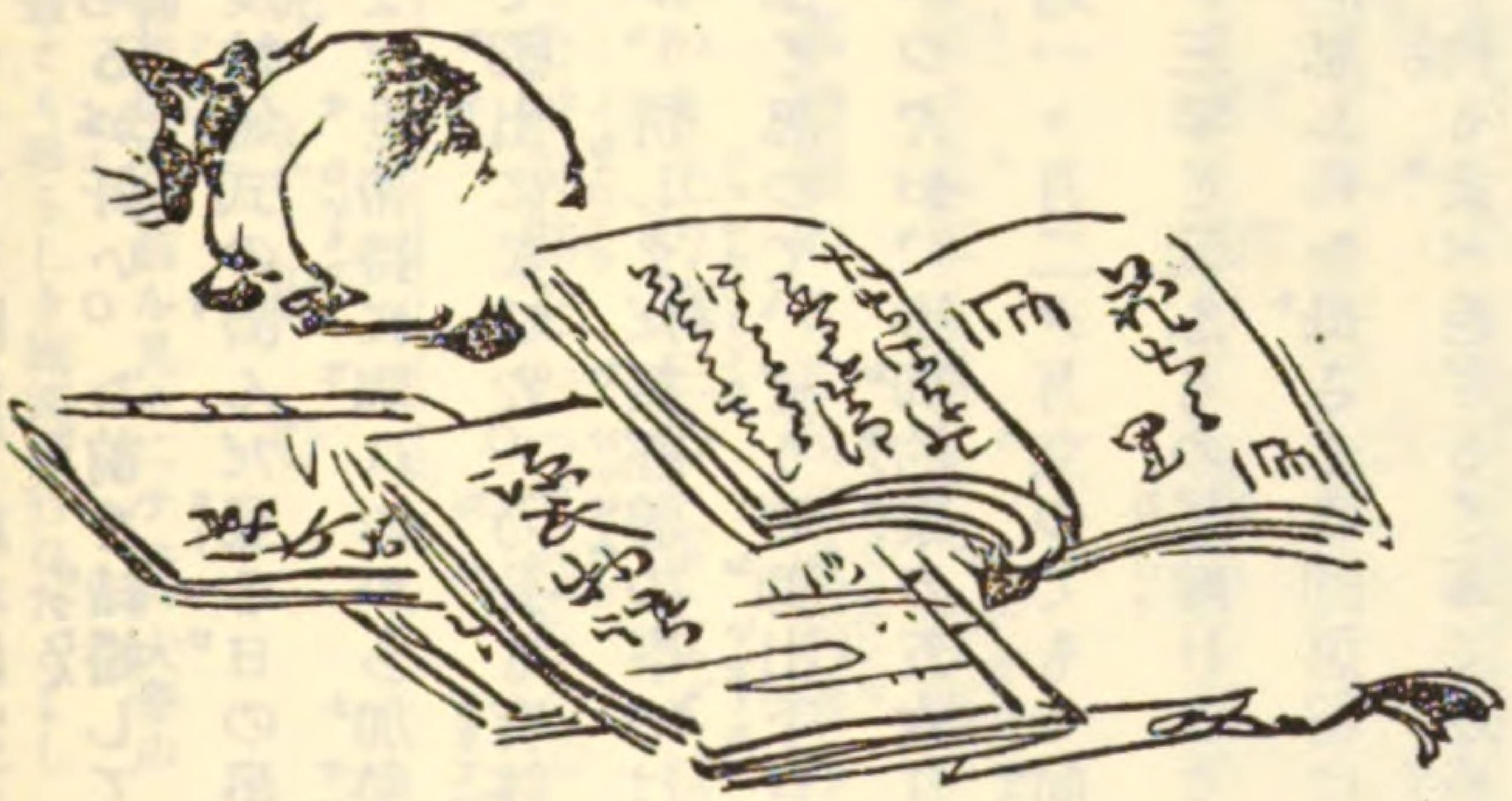
と一ト息つきて、

「全躰お前のお母さんは並大躰の方ぢやないよ。唯一寸



暮春雑事

逗留に來た御客樣で、後の方にすつ込んで居らつしやるなら好いが、何時も〳〵前へ出しやばつて此家の主人は此方だよと云はぬばかりの御權幕にやあ恐れ入るぢやないか。疊替する、いや備後おもては惡からよせの。御客をするなら洋食が好いの、なんのかのと御指圖ばかり、此樣言つてはあまり下品な樣だが、飯の菜一とつ乃公の好きなものは食はれぬぢやないか。イヤサ、ドゥあつても歸つて戴かにやならぬ」。妻はしく〳〵泣き出しながら「ではあなた其樣おつしやつて下さい。妾には出來ませんもの」。



暮春雜事

是れには流石剛氣の風間剛も閉口したり。實は娘の口より圓滑に退去令を下さす筈なりしが、妻は之を辭したれば、今は詮方なく此大任を吾肩に引受くることゝはなりたり。さて然り氣なく、

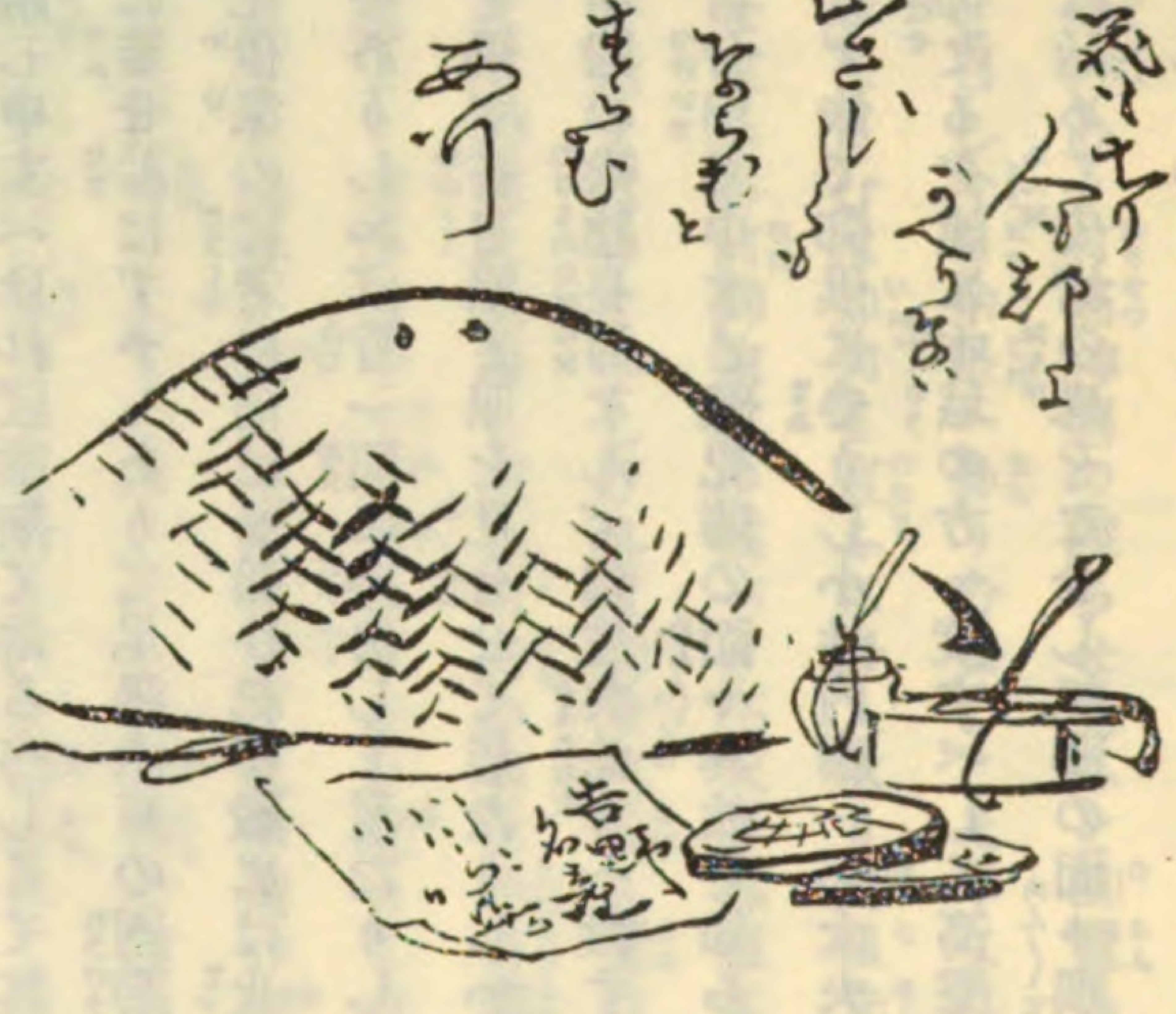
「よし〳〵。明朝乃公から其樣申上げてから」。

紀伊中納言

園部紫嶠

正德六年四月廿九日公赤松邸內なる岡山園亭に御弓の御稽古遊ばされし折本城より御使者あり三家の方々速く出仕あるべしとの事なりしかば湯漬一碗喰れ直に登城し給ひぬ然るに有章院殿御病重らせ給ふ由にて尾張大納言水戶中納言共に參り登り給ひしにぞ天英院殿の御旨として此度君の御病篤きにより文照院殿御遺命の

如く紀伊中納言殿御後見あるべき由古屋相模守間部越前守御言を傳へ參らせしに公聞し召され　門地を以て申さば尾張殿年齢をもて申さば水戸殿こそ今度の重任を承り給ふべけれ某に於ては更に想も依らぬ事なれば辭し奉ると仰らる水戸公唯其儘に御受あるべしと仰らる時に宿老等一人も詞を出す者なく越前守獨り進み出で文照院殿の御遺敎あれば速に御受ありて然



暮春雜事

るべしと申し上しかど猶あるまじき事とのみ宣ひて從ひ給はず其時天英院殿より御召に依て大奥へ參り給ひやがて御對面あり

天英院殿仰には文照院殿御遺敎の儘國家の政務を攝し給ふべし何事も唯賴み思すと宣ひて自ら熨斗鮑を配させられしかば此上は老臣等の公儀に任すべしとて立せ給はんとされし折天英院殿御聲高く此上の辭退ある可らずと仰せられしにより公怖れ入て拜し給ふ其時間部越前守傍に侍りて思召ありて何事も委任せ給ひし事なれば此後も棄させ給ふなと申上しに群議に任せんと仰ありて速に罷出給ふを水戸公待ち迎ひ給ひ尾張殿には祖統遠く隔りぬ公は正しく東照宮の御曾孫なれば御系統も近し曲て天英院殿御旨に委せ給ふべしと仰せられし尾に付きて再三再四越前守よりも勸め奉りしかど此時も亦宿老には一言も申すものなかりしとぞ

今はとて水戸公公の御手を採らせ給ひて上段に進め給

ひし後尾張公と共に佩刀を脱して拜伏せられしに紀伊公には其儘と仰せありて上段を下らせ給ひ此後も共に天下の政を議し申すべければ唯斯て侍るべしとて其日は遂に上段に着せ給はずや丶ありて尾張水戸の兩卿退出ありし時紀伊家の從者に向はせ給ひ紀伊殿には止り給ふぞと仰せありしかば皆一同に拜伏して居たりしかど何事か心を得ず各自眼と眼を見合せて居たりしか暫時して又紀伊殿の乘物長刀なんど調度共此方へ渡すべしと本城の目付出て申すと雖紀藩の面々其故を知らねば仲々に從はず依て御供に參りし小性内藤一郎太夫某奥より出て仰なるぞ速に本城の方へ渡すべしと高聲に呼はりしかば始めて安堵の思をなせし紀藩の面々調度を殘らず渡せしとか

かくて其日も暮ければ燈火點して殿上に昇り厨膳を賜り此度は玄關の上より乘物を奉り本城の人々紀藩の者と打交りて御供し二の丸へ移られしが此夜は陪從の面々皆御側に備り鯉口切て一夜を明しぬ

翌日有章院殿世を去り給ひしに依り此日より紀伊公を上樣と申し奉るべき由仰せ出されしが是ぞ今に到るまで紀州公方と扇丈の童すら語り傳ふる將軍なりき

此御所未だ御幼稚に在しまし源六君と申しける頃或日の事なりき御父權大納言光貞卿御子達を召れければ御兄長福綱教卿が事次郎吉早世長七少輔頼識が事御三人の方々に連れて御側近く參られしに光貞卿其時刀の鐔共多く入れし箱を御小性衆して採出させ給ひ此中心に稱ふあらば望に任せ與へなむ憚なく申さる可しと宣ひけるに御兄達は取々望み請はれしに源六君獨り知らぬ貌して在せしかば光貞卿殊の外怪まれ源六は何とて望みは申さぬぞ心に稱ふものなきかと御意ありしに余は兄君達の御心の儘撰み採られし跡にて箱の儘賜らんとこそ思ひつれ此儀願ひ奉ると答ひられしかば光貞卿打笑み玉ひ年に似合ぬ膽の太さよ行末こそ賴みあれ其方が望みに任せ

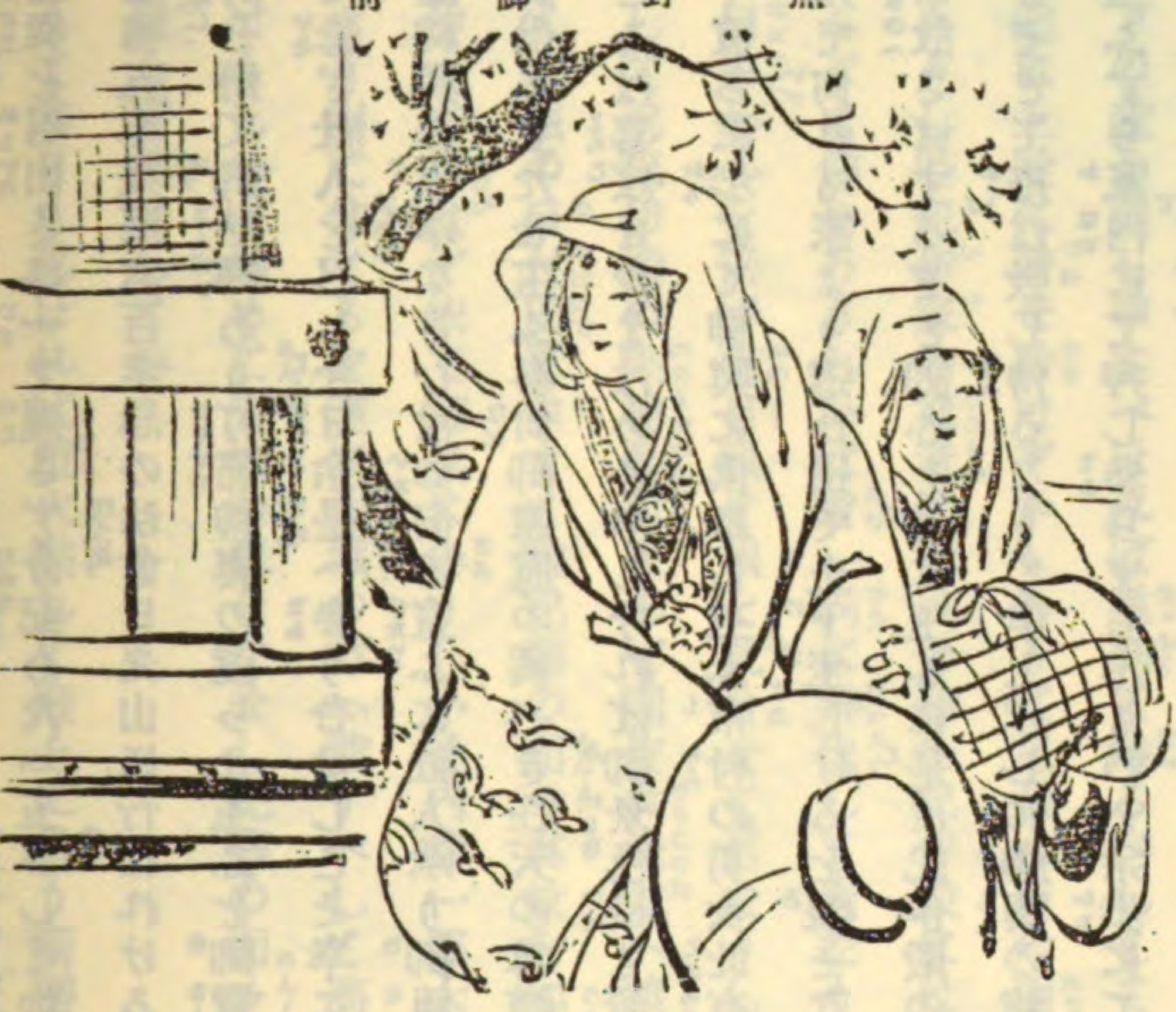
んとて殘れる鐔を箱もろ共賜りければ其儘其處を罷出たまひ平素〳〵住はせ玉ふ御館に戻らせ玉ふて後小性近從を召出され一ッ殘さず分配あたへ玉ひしとか

正德五年東照宮百年忌の法會日光山に行はれける時御許を得て御參拜あり打節神輿の渡らせ玉ふを御覧ありて急ぎ社人を召し今日余是へ參り合せしこそ幸なれ此儘神輿の供奉なさむは如何と宣ふに社人承り御祖先の御供に立たせ玉ふ事何御遠慮の候べき在天の尊靈も然こそは喜ばせたまはめと申しければ御景色最も麗はしく直ちに歩にて神輿に供奉し玉ふ市村の男女此有樣を見て何れも家より這ひ出で土下坐しけるを觀そなはし何故さばするぞと御心を注に玉ふに是は紀伊殿の御通りぞとて斯は致し侍るなりと申上げしに神輿の渡らせ玉ふすら家內にて拜し參らすらんものを余歩にて通行すればとて土下坐にも及ぶまじきぞと仰せありしとぞ

或夏殊に暑かりし夕暮時不圖庭に渡らせ玉ひ馬共御覧ありし時馬卒の部屋に紙帳の釣て有しを是は如何な物ぞと近從の武士に問はせ給ひしかばそは賤の者が蚊帳に代へて用ゆる物にて俗に紙帳と稱ぶ由言上し奉りしに余は殊の外廣き閨に美を盡せし蚊帳を釣りて凉しき夢は結べども猶堪へがたき折のあれば斯る紙袋に入りて眠る馬卒が苦しみは察するに餘りありと宣ひて直ちに蚊帳一張宛を賜りけり

此君の猶江府赤坂に在せし程の事なり例として御夕飯後近從の武士兩三名のみを引具し遍く城內を散步したまひ御身の養生且は藩中の風俗をも近く見聞し玉ける時近習の面々皆足を張り兩手を振て俗にいふ肩で風切る寛活風傍若無人の樣見えしに君には何と思しけん近習に倣ひ手を振り足を高く上げて城內を巡視したまひ御歸邸後偖仰せ出さるゝ樣汝等が步み振り余が試みし所にては疲るゝ事速にして遠く行き難し戰塲に往來す

る誠の武士は好みて爲すべき事ならず屹と愼むべき儀とお叱ありしといふ



熊野御前

暮春雜事

同じ頃月なく暗りし夜稚き小性二人を召し浴室に剃刀を殘し置きたり汝等が心の强弱を試みん爲なれば紙燭を探らで探り出し速に持來るべしと仰せあり二人承りつと彼の浴室へ行きて見れば眞の暗にて尋ぬべき樣なし如何して探らんと額を集めて議りけるに一人は唯心を沈め中腰になり透しながらに探らんといふ他の一人夫は餘り心長き業なり我爲んやうを見られよと板敷を踏鳴し剃刀の音から〳〵と聽えし所へ走せ寄り難なく探りて御前へ參りければ人皆好く仕てけりと感じ定めし御賞の御詞やあらんと思ひ設けゝるに透して探らんと申せし小性をこそ中々に淺からず御賞美ありけり

偖て前にも述べし如く文照院殿御遺敎の如く國家を處し玉ふ事になり有章院殿世を去り給ふて後ち靈柩を三緣山に納め奉らんと爲るに及んで宿老を召し梓宮の制を問ひ玉ふ前代の時より其制華美甚く御棺の後に刀架椅子の役あり四面の垂簾何れも金銀珠玉を以て飾れる由申上しに此度は思し寄す儀あればとて彼刀架椅子を去り金玉の飾をも皆退けて質素を基となすべき由仰

出さる宿老承り梓宮は既に故事の如く造りて侍るを今又更に改めんには其費用多かるべしと申上しに金銀を以て飾るは稱はす葬祭は國家の大禮にして用費を論ずべきにあらずと直ちに改造せられしとか味ふべき事にこそ

先代華麗の風に慣ひし人々は驚き奉る事此他にも多かりしとぞ

先づ二の丸に御移轉ありし頃より御服は古布を着され御膳部も蔬菜のみ多かりしが外廓御巡覽の折節など常に棧留の御袴を着けさせ給ひ老臣等進見の折柄御袴を穿れず長羽織にてありしかば人々不審氣に見上げ奉りしを御覽じて今より後は日毎に政事向を議すべければ斯は常の服にて參りしなり京都又は日光山の事を議する日は前以て其由申出べきなり正服して後聞んと仰せらる

又或時御坊主某を召され茶を持てとの御意ありしに今迄決して斯る事なかりしかば坊主大概ならず怖入り茶器を御小性衆に渡し罷出んとせしを呼止め玉ひ自身持參せよとの御意に膝行して奉りしを受け玉ひ偖て其茶碗に金もて御紋を蒔きたるを御覽じ常の調度にはと仰せられ其後は尋常の高原燒を用ひ給ひぬ

茶碗の事記しつれば茶壺の事をも記さんに山城國宇治の里より茶をめさるゝ事は寛永九年より始りぬ其前は茶道頭一人坊主二人其事を承り徒士頭一人組の走衆を引具し路次の警衛する事にて江府より茶壺數多携へ行き宇治にて茶を求め夫を京愛宕山へ百日餘り納め置き再び山より採り出て府に持ち歸る事なれば其往來の驛々御料の地は代官所より是を供し私領は領主々々より厚く接待し其嚴なる事たとふるに物なし然るに嚴有院殿の御時より茶壺を愛宕山に納むる事は止められ甲斐國谷村に納め置きて護衛の人々は皆府に歸り秋に到りて又彼處に赴き携へ返る事とせられしが猶驛路の費

役夫の勞少からず平素質素を好ませ給ふ公とていかで此儘に捨て置き給はん直ちに護送の武士各驛各領にて饗應を受くる事を禁ぜられ警衛の徒士頭を二條城に在番する大番一人と代へさせられ天文三年となりて谷村に納め置るゝをも禁じ京より直ちに府へ送り富士見の櫓に入れ置るゝ事とし給ひし後は費用を減じ勞苦を省くこと少からざりしとなり

此君の素行猶記すべき事澤なれど甘きを好む小供衆には如何あらんと想ふまゝに享保二十年甘露遍く降しとて天も世の太平を嘉し給ふと上下擧て嘉びし時京にてもそを祝させ玉ひて和歌の御會ありけるが其折

靈光上皇の御詠歌に

百年に一度絶て今見るもおもふにまれの露の古事

と遊ばされしを記して此物語の終りとなしつ

織田信長の恩賞

たとへば家に失火事あらんに、平生家の者にいましめて、火を大事にし、過ちなかりし人は賞せられず、火事にのぞみて、鬢をやき眉を焦せし人は、大に賞せらるゝが如し、されば常に火を愼しみけるこそ、火事出來て働きし人よりは、手柄なるべきをかへりて何の沙汰もなし、織田信長、今川義元と沓掛山にて戰のとき、梁田出羽守計をすゝめて終に勝軍となり、毛利新介、大に働き義元の首を取りてけり、信長馬より下りざる內、沓掛村三千貫を出羽守に與へ、馬より下りて新介を賞せられけり、誠に信長にあらざりせば、出羽守の功名新介に次ぐべかりしを(梅園叢書)

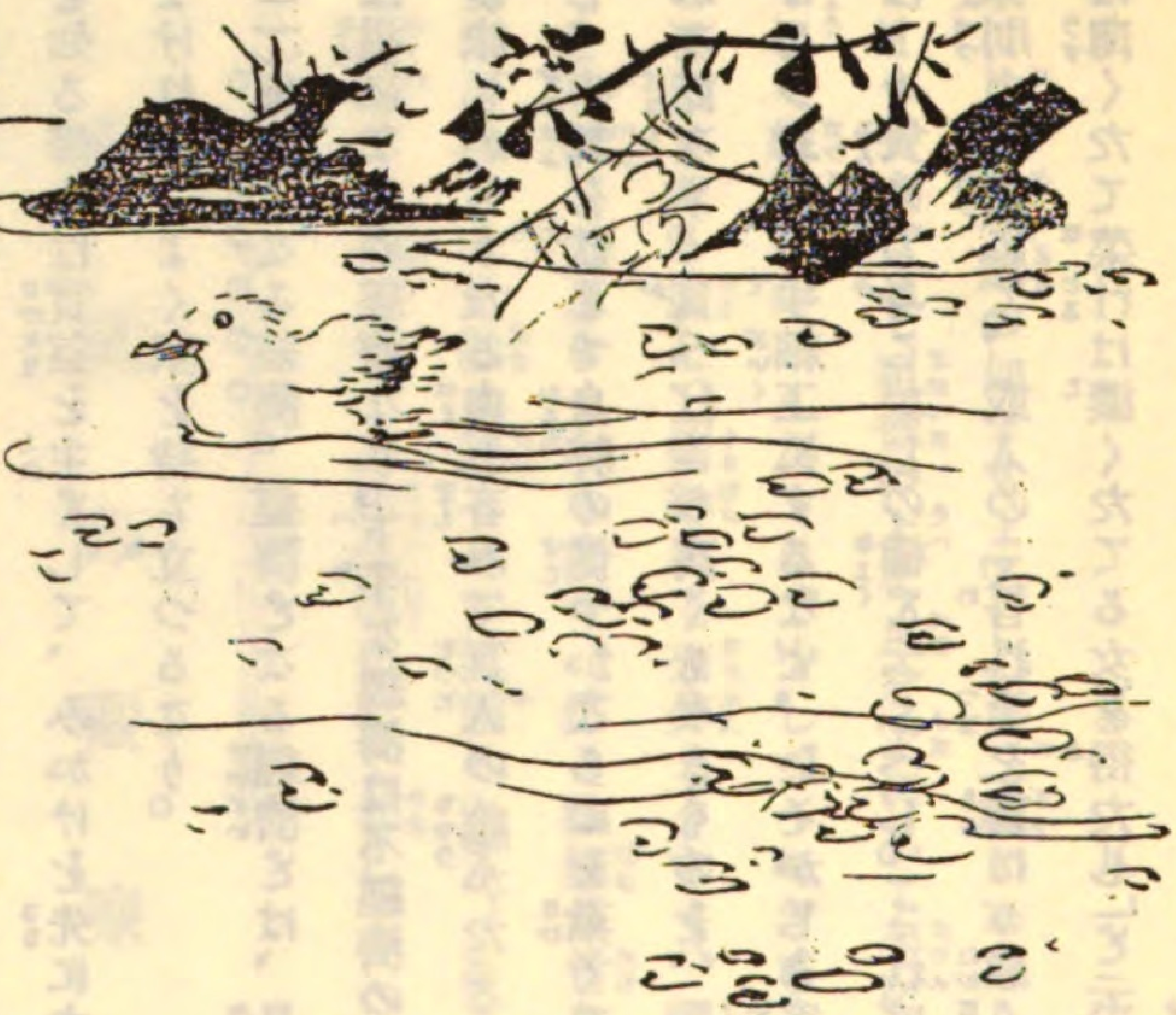
家政

好からぬ流行

K．K生

此頃外に出でゝ何よりも先づ目につくは、女や子供の卷煙草をくゆらすことなり。これは目下大流行にて黑縮緬の紋付着たる奥樣も前掛かけたる下女、小學校に通ふ子供、新聞賣の子僧はいふもさらなり、乞食の子

供まで巻煙草を口にし、甚だしきは母に抱かれたる幼兒の口より煙の立上るを見うく、衛生上經濟上の事



暮春雑事（乳兒）

は先づ措きて風儀上誠に見ぐるしく宜しからざる流行といふべし。蓼喰ふ虫もすき〲にて女子供に喫煙す可からずと云ふ法律もあるまじけれど、成る可くならば斯る流行はやめたきものなり。外の事は兎も角も第一生意氣に見へ、子供などは別して老少年の風ありて、直接間接の害誡に少なからず覺ゆ。斯る事は家庭に於て嚴重に取しまり、また小學校などにても制裁を加へたきものなり。

家政の兩金誡

K・K生

(一)**なくてすますの術**。誰にも必要なれど別して家持の女に大切なるはなくてすますの術にぞある。これは經濟と克己により行はるゝものにて、足るを欲すれば限りもなし、少しばかりの面倒はありても克己してなくてすますの道を知ると家持の大事なり。例へば小箪笥があれば便利と思ふところにも、いろ〲工夫して

菓子箱或は袋に代へ、俎板が二つあればと思ふところにも、裏を用ゐ一つにてすますといふ如く、總ての事些細の樣なれども、決して忽がせにすべからず。此術を知る婦人は實益を主として、みかけを先にすることなければ、よく家を持ち立つるなり。

(二)經濟となる經濟。經濟となる經濟とは、易くいへば損にならぬ經濟なり。下手な經濟は不經濟の極なり。變味しかゝりたる肉を吝みて良人の腸かたるを引起し、牛乳を飲まで身躰の健やかならぬを歎くなど、愚かな話なり。買へばさう高くもなきものを、一日も二日もつぶして手細工にするなど、いそがしき家持女にはトギ賃に刀身こかしの極と云ふべし。されば經濟は分別の異名にて、或人の「吾れ妻を貰はゞ願くは芋汁は薄くたて菜汁は濃くたてる女を得たし」と云ひしも、此の見わけあることを云ひしものぞかし。と經濟と云ふ中には金の經濟のみならで、健康の經濟、時間の經濟、氣力の經濟なんど色々あるものなれば、よく思ひはかりて不經濟なる經濟をせぬが肝要なり。

筍の新料理法

K・K生

此頃は筍の時節にて、其料理法につきては筍飯、ひとずり、にしめ、すみそ等いろ〳〵さま〴〵ありて、筍と牛肉と一處に煮て、御飯にかけて食する料理など已に行はれ居れども、こゝに一の新料理法あり。先づ筍の皮をむきて丸のまゝ湯煮て中をくりとり、さて牛肉なり鳥肉なりをたゝきて、燒鍋にし筍の中につめ、再び鍋にいれて味をつく、筍全躰色づきたる處にて其儘皿にもり供し、ナイフにて切りつゝ食す、其味ひ恐らくわすれがたかるべし。

上等の竹輪（つかひ肴のあまる時）

K・K生

鯛或は比目魚（鰺の如きもよろし）を二枚におろして脊骨をとり去り、さて俎板の上に皮を下にして平におき、庖丁にて縦横にかるくたゝき、少しづゝそぎとる、かくしてとりたる肉を、擂鉢にて充分よくすり、鹽と砂糖とを加減して又よくすりまぜ、然る後細き竹を心にしてにぎり、火を餘り近くせずに燒くなり、ありふれたる竹輪とは異なり、其味淡泊にして甘し。

家風の觀察

恕哉

予は嘗て本紙第七拾四號紙上に於て家政の觀察に關する愚考を述べしが、玆に又た家風を觀察するの方法を陳べんと欲す、蓋し各戶の家風なるものは、千差萬別固より簡單なる左の方法のみに據る事能はざる點なきにあらずと雖も、以て其大概を察するの材料たるを以て、家政の觀察（家庭雜誌第七十四號參照）と兩々相對照して讀者の一粲に供せんと欲す。

國家の基礎は國民にあり、故に國家の健全なると、不健全なるとは國民の健全なると否とに基因す、換言せば國家の根底は家庭にあり、而して其家庭の純潔なると汚濁なるとは、直接に國風の善惡に關係するものなれば、各戶に於ける家庭の風儀なるもの、豈に輕々に觀過すべきものならんや、予が爰に家風の觀察を說くもの穴勝ち徒爾とのみ言ふべきものかは。

各戶家風の如何を觀察せんと欲せば、先づ日々或は月々其家に入り來る新聞及雜誌類によりて考一考せよ、今や我國に於て大に新聞雜誌の數を增し、從つて戶々概ね新聞雜誌を手にせざるの家庭なかる可し、而して

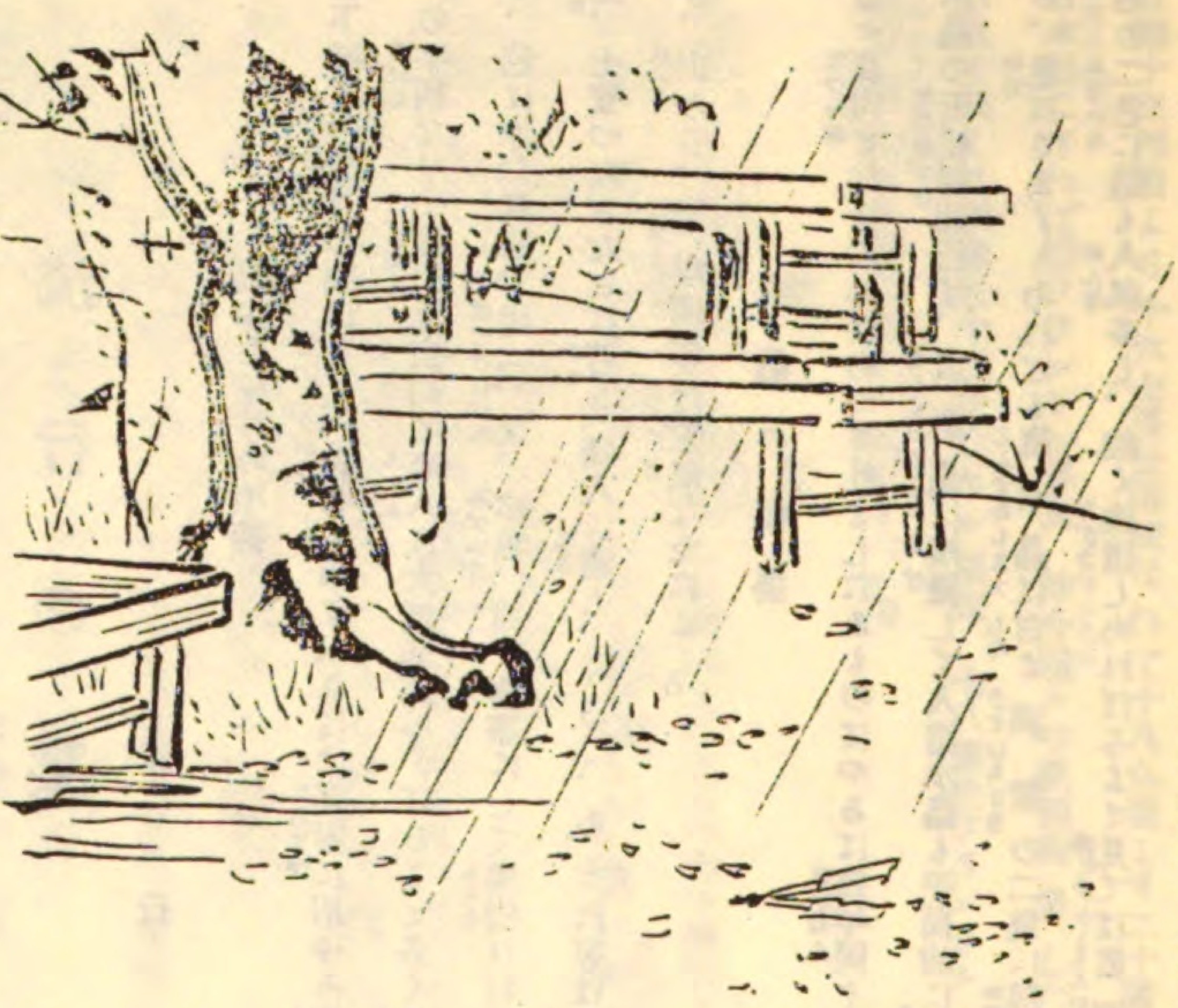
其新聞雜誌中、或は純潔にして正大の記事を掲ぐるものあり、或は卑猥にして讀むに耐へざるの筆を弄するものあり、政論に巧なるもあれば、實業談に得意なるもあり、勉めて人か美を稱揚せんと企つるもあれば、求めて人の惡を發かんと欲するもあり、謹嚴の文字に赤誠を吐露するもあれば、浮薄の言辭に一世を瞞着せんとするもあり、此等の新聞雜誌が各戸の家庭に歡迎せられ愛讀せらるゝ種類の如何は、以て其家風の大概を卜知するに足るべき材料たらざるを得ず。

一家の支配者たるべき戸主たる者の思想は直ちに一家全躰の風儀に反映するものなれば、家主の思想下劣なるときは、隨つて家風の上に下劣の反照を來たし、不健全なる家庭を形成するに至る可し、而して斯る家庭に歡迎せらるゝ新聞雜誌の種類は、是非共浮薄、淫猥、下劣の文字を以て滿されつゝある者たらざるを得ず、家主の好む所は、遂に一家中の好む所と爲り、一家中の好む所は、是れ即ち家風の依つて起る所なり、不健全にして卑猥なる文字を愛賞するの家風を有する家庭には、遂に一家の良心を埋沒し去り、娼妓の心中談を以てこよなき快話と心得、藝妓のカケ落話を以て無上の好談柄と爲すが如き、因習風を爲して容易に戒醒の期なかるべし、故に各戸に就きて其家庭に歡迎せらるる新聞雜誌の種類によりて、家主たるもの思想の高下を察するに足り、家主の思想を察するは、乃ち家風の如何を觀察するの好材料たるべきなり。

斯く卑猥淫蕩の文字を喜ぶものは、多くは品位思想の下劣を證すべく、謹嚴正大の筆を好むものは、概ね健全なる家風を有するの人たるを察するに足る、而して外部の刺激及內部の境遇等によりて、知らず識らず國風の推移するが如く、一家の風儀なるものも多少推移する所なきを得ず、是れ實に社會敎育上忽緒に附すべからざる問題にして、心ある者は其推移の指針をして、

純潔、健全なる方面に向はしめんと欲するや切なり。」

社會敎育上最も有力なるものは新聞雜誌に若くはなし



暮春雜事（春盛）

卑猥下劣の家庭あるが故に卑猥下劣の新聞雜誌を歡迎するか、或は卑猥下劣の新聞雜誌が斯る家庭を養成したるかは、暫く爰に論及せざる可しと雖も、兎に角一家の眞心を發揮し、光明ある家風を形成せんと欲せば、勉めて謹嚴正大の文字を愛賞するの風習を涵養せざる可らず、家風の推移は延ひて國風の上に影響し來り、卑猥淫蕩の家風は、バチルスの傳染するが如く、遂に國風の上に治すべからざる疾病を傳播するに至るべければ、家風の高下は輕忽に觀過すべき事柄に非ざるなり。

要するに各戸家風の高尚なると、下劣なるとは其家庭に歡迎せらるゝ新聞雜誌の種類に依りて判すべければ、勉めて高尚、純潔、正大、謹嚴なる者を擇まざる可からずと言ふ所以なり。

社交一斑

流行の栞

流行子

繻多しぼりの手柄

目下婦人の髮具の間に大流行とも申すべきは、丸髷に用ゆる繻多しぼりの手柄なり、近來社交的の婦人は大抵此品をかけることゝ多く見受けらろ、色は赤、紫紺、鳩羽鼠、水色、紺、肉等にして模樣は牡丹、菊、蔦、七寶つなぎなどは若き婦人に適し、うろこ、あられ等は年増に向き、山みち、飛模樣等は意氣な女によし。

水晶の根掛

追々夏向となりたればあつさりしたるものはやるは毎年同じ事なるが水晶の玉根掛流行す、眞水晶に模擬して人造水晶も平民的に流行さなろ、色はさまぐ〜あれども眞水晶は白と淡紫の二色に限るを以て右の二色に最も人氣多し、能く模造しあればちよと見ては眞贋別ちがたし。

簪の脚及球

當世流行の簪に於ける脚と珠は次の如し。

金脚ならば之にはまる珠は珊瑚なり、徒に大なるを好まず、色は桃色にして生地に瑕瑾なく杢目の面白きもの第一位に居る、金屬製の彫刻も大に行はる。

鼈甲脚には珊瑚珠に限る。

瑪瑙珠は血を流したやうな眞紅にして鮮明なるを厭ひドンヨリしたる色合を好む、脚は鐵か、いぶし銀か、若しくは金脚を用ゆ。

象牙脚は重に夏向に適し、翡翠珠か、蝶貝又は七寶燒を取り合はす。

埋朱珠は瑪瑙珠と等しき脚に用ゐて妨なし。

近來新に流行するものは珠も脚も鐵臺にして精巧の金銀象眼あるものなり。

桃實に精微の彫刻（譬へば七福神の如きもの）を爲したるもの奇を好む社會に持囃さる、至つて輕氣のものなり。

脚の流行形は脚に模樣の彫刻あるものは蛙股、無模樣、無彫刻は笹形なり、耳搔は三四分の處にして耳の大なるを喜ぶ。

洋服

昨今は洋服夏着の新調時期なるが今直段を記さん◎モーニングコート黒の綾羅紗にて上着チョツキとも十三四圓ズボンは縞物にて七圓前後◎

フロックコート上着チョッキは矢張り黒の綾羅紗にてズボンは縞セールにて三揃二十二三圓より三十圓迄◎背廣　薄羅紗又は薄スコッチにて三揃十三四圓より十六七圓位兩前なれば十八九圓より二十圓までさて日本服にすれば◎フランチル單衣　昨今種々の新柄到着したるが三圓八九十錢より四圓五十錢位◎セル單衣　七八圓位フランチルとセルの流行新形は次號に詳しく記載すべし。

帶留

◎六打　太き丸打の紐にて金具なしに結ぶものなり（七十錢以上一圓位）

◎撚廻　是れも六打と同じく太く丸き結び紐なるが紐の兩端に糸の口の見えぬ樣作りあるなり（一圓五十錢位）。

◎太白　の糸五十本を合はせ其の眞中の處二寸程を三ッ打になし前後をバラの儘にして其の兩端に鈎を付けし物にて掛けても結びても好き樣に作りあり今最も流行の摸樣なり銀の鈎付にて（三圓位）。

◎鈎留　と唱ふる在來の形にて袋打となり居る物は二圓位にて以上の物の如く流行と云ふ程にはあらねど可なりの賣れ行。

◎高麗　打と云ふは刀の下緒の如く組みたる金物の附く紐なり（紐のみにて一圓五十錢位）

◎絎紐　繻珍、絹、縮緬等の中太の綿を入れし縫紐にて先年流行したれど破れ易き爲めかすたれり。

◎金具　帶留の金具は細工次第にて少しも値は極られど大抵金にて五圓内外銀にて七八十錢より一圓二三十錢迄なるが珠母貝と云ふ美しき貝にて其の貝の自然の色を生かして種々の花など作りし物あり以上七八圓位なりといふ。

雜録

區々の細君

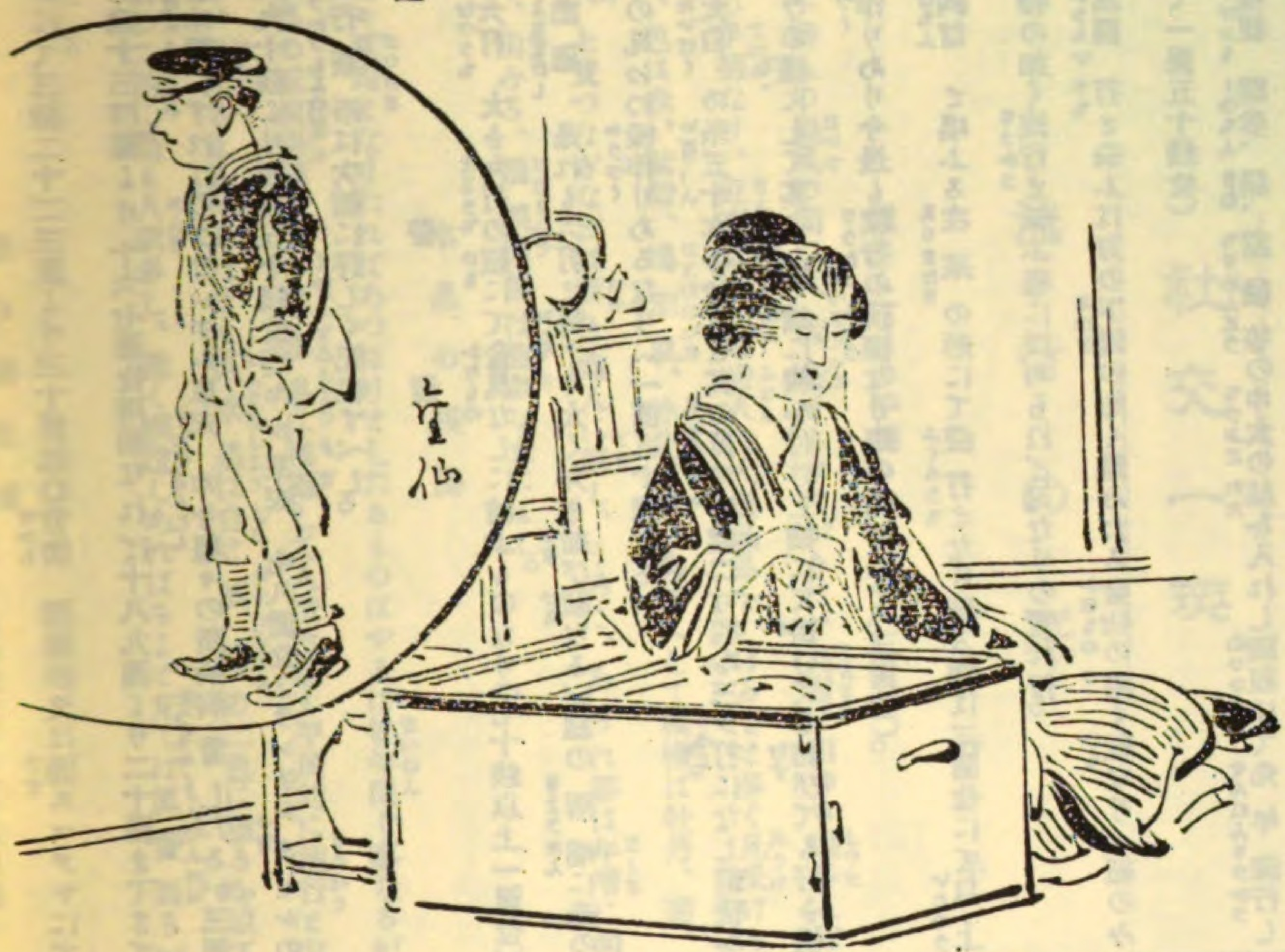
樂齋

麹町區……官吏の細君

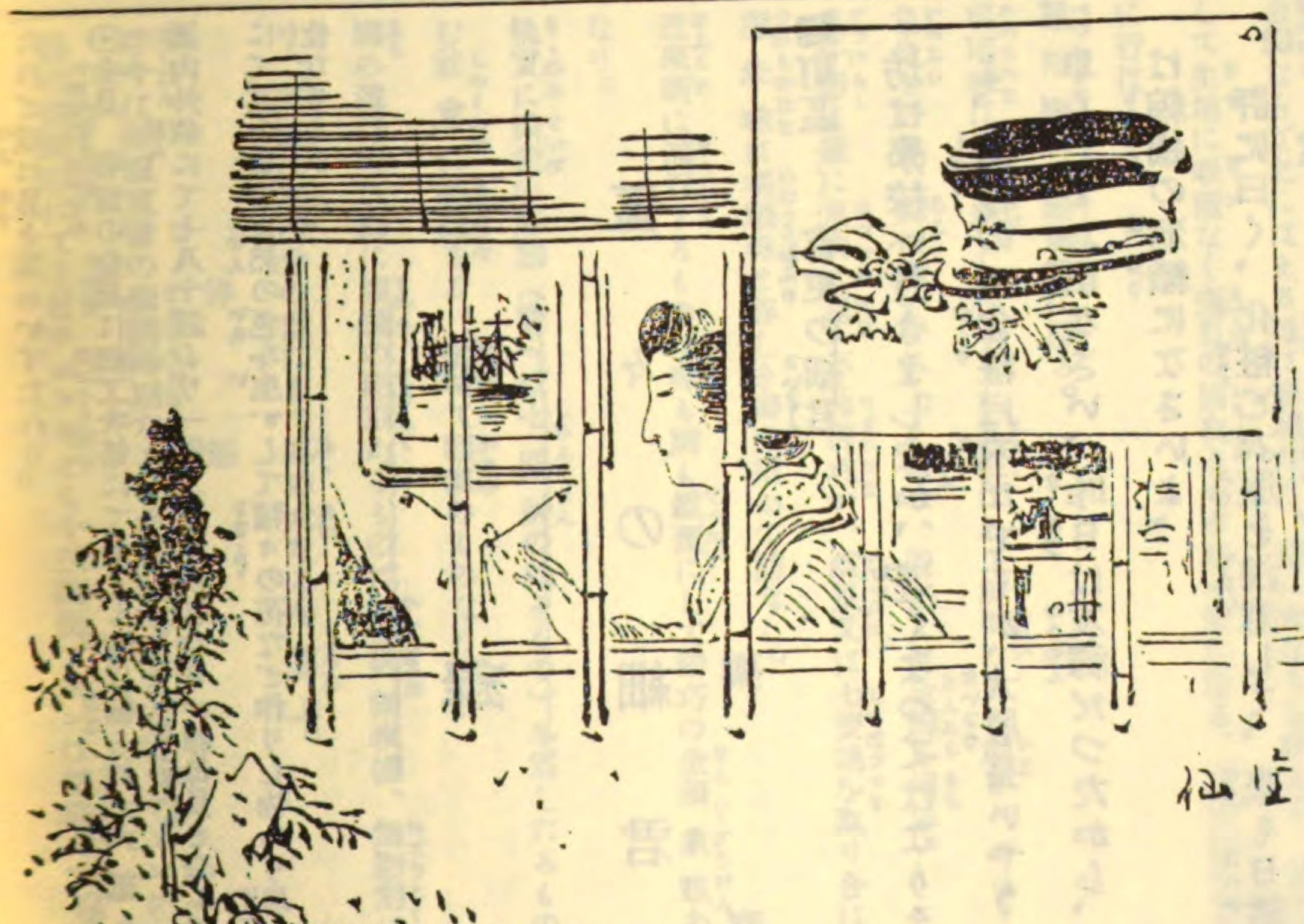
坊は學校へ行きましたか、遲くなつてはなりませんよ、靜枝のお化粧は未だですか、大層長いやうだね、早くしてお出なさい、昨日は友禪だつたから、今日は縮緬の羽織になさいよ、

評に曰く、化粧と衣服を注意して、毫も日課の事に及ばず、其子の末路想ふべし、

麹町區



赤阪區



赤坂區…軍人の細君

貴女の旦那様のも、金鵄勳章で御座いますか、良人のも同様だと、申して居りました、お互様に、肩身が廣くなりましたやうで、何だか一時は、夢のやうな心持が致しましたが、一昨年の事を考へますと、可笑い話が澤山ございますよ、丁度菊時分でしたね、妾がチョット御訪問申した時、良人が戰死なすつたら、如何致さうと申して、大泣きに泣きましたつた、チー、チホ、、、、、

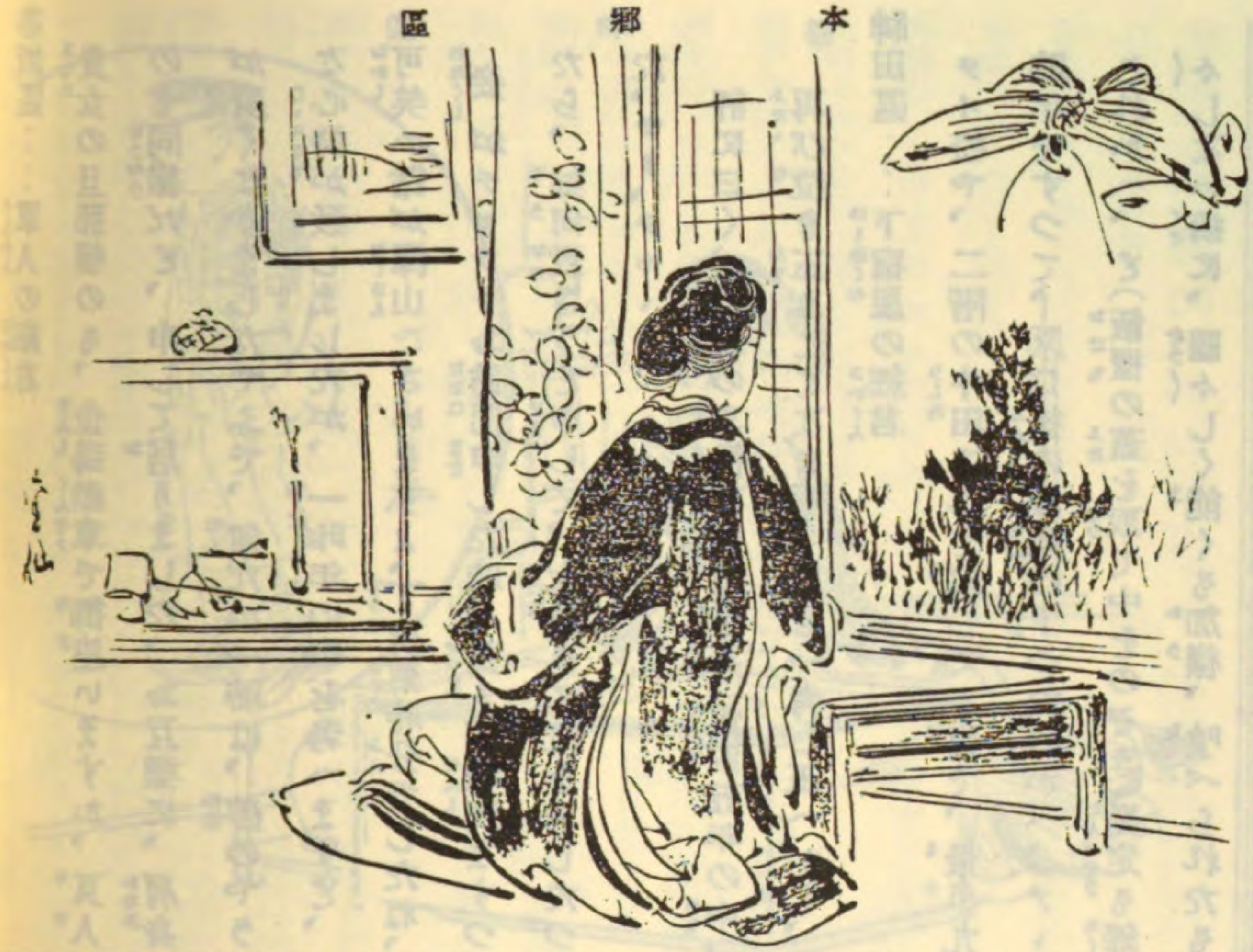
許に曰く、細君の喜悦は道理千萬、但四五年の中、再び泣き玉ふことなき乎、三思一考し玉へかし、

神田區…下宿屋の細君

ヲイ松や、二階の牛田さんを起してお出で、最早九時半ですつて、原口様のお膳は下つたのかへ、アヽこれかへ、と(飯櫃の蓋を取て中をのぞき)勘定も錄々しない癖に、圖々しく能くも加様、喰べられたもんだ、何時も飯櫃がから天竺だから、驚いちまう、



神　田　區



ホントニ大食と食逃は、下宿屋の大禁物だヨ、

評に曰く、食の進むは胃の健なるが爲なり、胃の健なるは、志想の健なる證なるべし、我は食氣一方の書生殿を喜ぶものあり、細君の陰口、敢て恐るゝに足んや、

本郷區：：：學者の細君

世の中に旦那位妙な方はない、始終打とけて、談話をなさつた事はなし、と言て別段御機嫌の悪るいのでもなし、毎日〳〵蝸牛や蜘蛛と、首つ引を爲つて、面白さうに調べてお出でなさるのは、何の爲になるのだらう、過日も、蟻の脛に、梅毒が出來て居るのを發見したと、大層喜んで居らしつたが、其お嬉しさうなお顔といつたら、妾が此家へ參つてから、始めてだつた、旦那が平素仰るには、行夜蟲のおなら程、美妙のものは、あるまへと、いかなこつて、蟲のおならが、音樂に聞へる人が、あるものか、チヤチ

ヤチヤ、庭に不思儀な蟲が這て居る、アレを取て行て、丸帶を强請る、材料にしませう、

許に曰く、奇蟲を捕へて、帶をねだる材料と爲す、是又一個の政畧家なるかな、

一 少 年

淸和之候筆硯益々御多祥欣賀之至に奉存候然は輕薄なる世の中にイト珍敷一少年の佳話有之殊に一人は當地の者又一人は先生と御同國なる熊本縣の人なれば御通信致にも何となく愉快に相感じ申候何卒左の事實家庭雜誌へ御掲載の程希望候

北海道石卷町住吉町米穀商四倉源藏二男宗吉（十九才）と呼べるは軍人として身を立てんとの志望を懷き先の年東京へ出で神田倚武校に入り黽勉怠りなく且つ品行方正にして學業優等の聞えありしが或るとき國元より送付されし學資金を途中に於て遺失し更に送付を乞ひしが實兄儀藏より將來を戒しめ叔父の名義にて送金せり然るに三月四日に至り突然左の郵書一通到達せり

拜啓小生元と貧家に生れ候へ共一片の志を存ずる者如何とも致し東都に遊び學を俊才に受け交りを有爲の士に結ばんとを欲し毎日僅少の金を貯へ漸く路費を得候故遠く笈を東都に荷ひ爾來牛乳新聞を配達致し或は椀車を挽き候て若干の金を得粗食命を繋き勞働の餘暇私立芝區倚友學校に通學罷在候然るに昨春愚母大病の旨國元より急電父は幼少の折此世を去り今又母大病の報に接し實に驚入候併し前陳の如く漸く露命を繋き居候小生に候得ば歸國の上枕邊に介抱致し度は寸時も念頭を相去り不申候へ共路費を調ふること相出來不申涙を飲んで空しく故郷の空を望むの悲境に陷り申候偶貴君宅の書留を麴町御堀傍に拾ひ開き見たるに紙幣八圓有之候故天の與と大に喜

び之を路用と致し歸國仕終日枕邊に侍し介抱怠ざりし爲め遂に病氣も平癒致し大に安堵致し候翻て既往を追考致候に貴兄御遺失の金子を以て其儘歸國致候に就ては無かし御困り被遊候事と何とも謝し樣も無之候何卒御憫赦被下度別紙爲替は魚類行商の利金の貯蓄に有之早速御返濟可致候之處右の次第にて延引ながら御手紙と共に差送り申候間御受納被下度大罪遁れ難く候へ共君の御仁心御怒り無之候はゞ幸之に過ぎず先は御謝禮迄頓首再拜

二月廿九日認む

熊本縣北千反畑町八十番地　徳永長平

東京麹町區五番町十八番地高橋方

四倉宗吉樣

右の書面を得るや四倉は直ちに該金額を返付し徳永の再上京を促し申候その實兄へ寄せたる書面は左の如くに候

拜呈陳者殘寒未だ相去り不申候處御兄上樣には如何御消光被遊候哉伺上申候降而小生義益ゝ元氣に候間御安心被成下度願上候却説昨春學資金を遺失致し父上樣に申上兼ね叔父上樣に再び御送金を請ひ御兄上樣より怪訝の至りとの御書簡を頂戴致し候併し御疑念相晴さん樣もなく本日に立至り候處去る九日高橋より別書面相屆け呉れられ一讀實に徳永なるものゝ正直に感じ二讀其貧困を憐み金子は其儘返戻相與へ候就ては禮狀も有之候に付き送付致候間御一覽被下度叔父上樣にも御覽に入れ被下共々御疑念御晴し被下候へば難有奉存候先は右申上度斯の如くに候早々頓首

三月廿五日　宗吉

御兄上樣

徳永より四倉への返翰に曰く

拜復昨日行商の歸宅致候處御芳翰到着致候早速拜

誦仕候然るに去る一日御返濟申上候爲替金御返戻に相成且つ之を路用として出京せよとの御懇囑に預り實に遁れ難き大罪を犯し殊に未だ御拜顔をも得ざる貴兄より夥大なる御惠與を蒙り候段義に於て致し難く候へ共決して返濟は受けじとの御文言再び御返戻申上候も無益と存じ御厚志に從ひ難有頂戴仕早速出京素志貫徹可致行商の利金を得路用と致し出京致さんと存じ居り候折柄實に登天の思有之候併し母を捨て去るに忍びず候へ共幸ひ他家へ嫁し候姉有之候に付母の世話を相托し愈々來月上旬には出京致さんと決心致し候何れ御面會の節厚く御禮可申上先は御禮旁々御報道申上候早々謹言

三月十四日　德永長平

四倉様

右の事實を見ば德永の正直、四倉の義氣を見るべく候然るに不幸にも四倉は過四月一日頃よりチブスに罹り神田神保病院に入院治療中去る十二日死去せる旨電報あり誠におしむべき少年に候はずや彼の德永も本月は上京四倉と面會を樂しみしならんも斯報に接せば如何ばかり殘念ならん先生希くば彼の德永と御面會の節も御座候て將來有爲の士と御認めあらば御引立あらんとを先づ右御通信申上候也

四月十三日　石灣生

蘇峰先生梧右

林由義先生の家庭敎育に關する遺稿（中）

中川愛氷

先生ひなび歌と題して歌數百首を作る其中いろは歌四十七首を得たれば左の如き標題を設け諸君の一粲に供す聞く此歌は或夜孫なる人のいろは骨牌書きてよと云ふにさらばとて一首詠みては一首書き二首詠みては二

首書き斯て吹煙一服の間にいろはの數に充ちたるもの
なりと殊に兒童にも解し易く亦誦し易きを求めたれば
自然調子の卑俗に傾き就中是はと思ふものなきに非ず
願くば先生が一塲の座興にも敎育に熱中する心の深き
を汲み其歌の卑俗なるを咎むる勿れ

俗調いろは歌

(い)いやな事つとめてなすもすきなこと
　　氣儘にせぬも義理の世の中
(ろ)論ずきな人に實義の人はなし
　　いはで行ふ人ぞ人なる
(は)母親へ我儘いはでうやまへよ
　　これ德孝のはじめなりけり
(に)にこ〳〵と笑ふは神のすがたにて
　　にがみし顏は鬼とこそ見れ
(ほ)程のよき人の心に油斷すな
　　はては眞實のなき人と知れ
(へ)返事ぶり速なるはいさぎよし
　　これ孝弟のこゝろなりけり
(と)時々にこゝろの垢をあらへかし
　　きよき誠を湯や水にして
(ち)智や才をはなにかけたる高慢は
　　不德をまねくえせものと知れ
(り)律義なる人はたのみになるものぞ
　　世事よき人に心ゆるすな
(ぬ)盜人の多く出來るをうれひなば
　　かみたる人の慾をとゞめよ
(る)留守番は德實物を擇ぶべし
　　おほやけ事もかくはありたし
(を)惜欲といかり妬のあらざれば
　　こゝろゆたかに世をや經ぬらむ
(わ)私をなさで主人の爲によき
　　ことをはかるは眞の忠順

（か）神佛いかに信心するとても
眞なければまもりたまはず

（よ）よきことをなす人ならば千早ふる
神の守りはありとこそ知れ

（た）誰もみな不忠不孝はよからじと
知りて不忠や不孝するとは

（れ）禮儀ある人こそ見るもゆかしけれ
不禮の人と交るなゆめ

（そ）そゝうせばまけをしみなく詫をせよ
いひわけするは罪の上ぬり

（つ）つゝしみがあればこゝろに油斷なし
油斷なければ手おちすくなし

（ね）ねんごろにすれは物ごと麁相なし
そゝうは念の入らぬ故なり

（な）なさけありて惠みふかゝる人ならば
神やほとけのこゝろなりけり

（ら）亂をなし亂を好める人ならば
道にそむきし人とこそしれ

（む）睦しく家の和合を願ひなば
我儘するな不足ありとも

（う）運は寢てまてといふこそよき事を
つみ重ねよといふ教へなれ

（ゐ）田舍には律義が多し繁昌の
地には實義の人ぞすくなき

（の）望ある人の心をたづぬれば
立身出世榮華歡樂

（お）おもひこみゆるみたゆまず何事も
學べば奥をきわめこそすれ

（く）苦勞こそ樂のたねなれらくばかり
求むる後は苦勞とぞなる

（や）やり嫌ひもらひ好きなる横着の
こまり物こそ世には多かり

（ま）誠ある人の心は花なれや
見ても聞きてもみごとなりけり

（け）化粧して顔は綺麗に見ゆるとも
心きたなき嫁はめとるな

（ふ）不仕合ありとて世をばうらむなよ
　恐れつゝしみよき事をせよ

（こ）子供とて氣儘にさせし其くせは
　やがて親へのあだとこそなれ

（え）得手をして心がゝりに思はぬは
　よくの闇路をゆけばなりけり

（て）天道をあふきうやまひおそれつゝ
　かりにも惡きこゝろたもつな

（あ）惡人といはれて腹をたてながら
　あとより惡をなすぞかなしき

（さ）酒はよきものといへどもすぎぬれば
　身をはやぶれり家はみだせり

（き）君に忠親に孝行なき人に
　すゑわざわひのあらでやはある

（ゆ）行末の樂を願はゝ若きとき
　苦勞いとはずはげめはたらけ

（め）目に見えぬ心のうちのよしあしも
　言葉のはしに匂ひいでなん

（み）身の程をよく／＼思ひかへりみて
　及ばぬ眞似はするなおごるな

（し）死ぬことは誰もきらひでありながら
　不養生する人ぞあさまし

（ゑ）ゑみ含む誠こゝろの愛相は
　にくしと思ふ人なかりけり

（ひ）ひづみたる心をもてば筋道の
　わかりし人もあしくいふもの

（も）物ずきは得手に流るゝみちびきぞ
　義理となさけにうとくなりつゝ

（せ）善となり惡となるのもおのれから
　こゝろひとつのむけしだいなり

（す）すべなくて朝寐ひる寐や夜あそびの
　呑喰ずきはせんすべもなし

社告

歌苑欄三十一文字募集の分は次號に掲載すべし

●前號口繪のゑさき小金井櫻の條に「此の櫻は慶應年間」云々とあるは「承應年間」の誤

本社電話番號七十番

發行兼印刷人 金子佐治郎
編輯人 金子佐平

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舎印行